HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	中世後期ドイツにおけるライン宮中伯の領邦支配とヘゲモニー (3)
Author(s)	田口, 正樹
Citation	北大法学論集, 64(5), 23-65
Issue Date	2014-01-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/54533
Type	bulletin (article)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	HLR64-5_003.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

論　説

中世後期ドイツにおけるライン宮中伯の領邦支配とヘゲモニー（三）

田口正樹

目　次

はじめに
一．中世後期プファルツ政治史
二．王権および帝国国制との関係

（一）帝国国制上の特殊な地位
（二）国王領の質入れとプファルツ領邦の形成
三．君主家門の意義
（一）相続関係の規制（分割相続と長子相続）
（二）婚姻関係
（三）墓所の選択
四．領邦支配の諸手段
（一）宮廷
（a）宮廷役職
（b）書記局
（c）顧問
（d）宮廷裁判所
（e）中央の財務行政
（f）宮廷所在地としてのハイデルベルク
（g）文化的中心としての宮廷
（二）ハイデルベルク大学
（三）アムト制と地方行財政
（四）教会政策
（五）軍制
（六）領邦立法
（七）収入と租税
五．領邦諸身分とプファルツ意識
六．地方の秩序とヘゲモニー

（以上六四巻三号）

（以上六四巻四号）

（以上本号）

おわりに

（f）宮廷所在地としてのハイデルベルク

中世後期ドイツの諸領邦における宮廷所在地 Residenz の形成とその機能は、近年多くの研究がなされているテーマである。[1] プファルツにおいては、ネッカー河畔のハイデルベルクが、宮中伯の宮廷所在地として発達していった。[2]

元来ヴォルムス司教から宮中伯に授与された教会レーンであったハイデルベルクは、[3] 既に一二世紀末から、ライン宮中伯にとって重要拠点の一つであり、[4] 一三世紀初めには市民団体の存在も確認されるが、[5] 一四世紀中頃にも、まだ人口約三〇〇〇の中小都市にすぎなかった。しかし一四世紀後半に宮中伯ループレヒト一世のもとで、ハイデルベルクは宮廷所在地として争われない地位を確立する。

ループレヒト一世の滞在地点を見ると、判明する限りではハイデルベルクでの滞在頻度が他の地点を圧しており、[6] また証書発行の面でもハイデルベルクは主要な発行場所となった。[7] ループレヒト一世はクリスマスや復活祭などの重要な教会祝祭をしばしばハイデルベルクで祝ったものと推測され、またハイデルベルクは一三八四年に国王ヴェンツェルが諸侯と都市同盟の対立の調停を試みた、いわゆるハイデルベルク和議 Heidelberger Stallung の舞台となるなど何度か皇帝・国王の来訪を見、更にループレヒト一世はいくつかのトーナメントをハイデルベルクで催した。[8] ループレヒト一世は、ハイデルベルク市の発展のための措置をも講じた。一三五七年になされた年市（メッセ）設立の試みは持続的な成果をあげなかったが、[9] 後で詳しく論じる一三八六年のハイデルベルク大学創設は、市の発展にとって重要な刺激となり、かつハイデルベルクの中心地的機能を高めることになった。[10]

このような中心地としての発展の一方で、ハイデルベルク市における市民自治の展開は、宮中伯によって制約されていた。市長職と都市参事会員職への就任が宮中伯の同意のもとに行われるべきことは、一三五七年に都市側によって改めて承認された。それにとどまらず、宮中伯は場合によってはこれらの職の任免をみずから行うこともできるものとされた[11]。

確かに、ループレヒト一世の移動行動があいかわらず活発であることは見逃されるべきではないが[12]、他方でこうした宮廷所在地形成の進展は、中世後期ドイツにおける支配の濃密化を反映し、その動きを更に促進するものであったと言える。ループレヒト一世の治世はこの面で、プファルツ領邦とその影響圏の歴史の中で、大きな意義を有していたと見ることができる。

ハイデルベルクの宮廷所在地としての発展は、ループレヒト一世の死後も大きな断絶なく継続された。一三九二年には、ループレヒト二世が、近傍の豊かな村ベルクハイム Bergheim をハイデルベルクに併合し、これにより市域は旧市の西側へ一気に二倍近く拡大された[13]。更に国王ループレヒトのもとで、前述のように家門の宗教的中心として聖霊参事会教会 Heiliggeiststift もハイデルベルクに設立される[14]。一五世紀の間に、ハイデルベルクの城は、時代に合った軍事・統治・居住設備を備えた居城 Schloss へと拡張された[15]。一四五七年に宮中伯フリードリヒ一世は書記局用にハイデルベルク市内の建物を購入し、それが一四六二年に消失した後は城の近くに別の建物を建てさせたが、そこには書記局以外に顧問の会議室と宮廷裁判所用の会議室も所在していた[16]。都市の人口自体は一五世紀中頃にもまだ五〇〇〇人程度と推定されるとはいえ[17]、ハイデルベルクはこのようにして、近世的な居城と官庁を備えた領邦首都へと発展していったのである。

宮廷所在地の形成の反面として、ハイデルベルクの宮廷に集まる多数の人員をいかに養うかは、一つの大きな問題と

なった[18]。宮廷に必要な物資は、ハイデルベルク近くの宮中伯所領などから供給されたと考えられるが、中世末には、所領からの現物供給は後退し、都市の市場を通じた調達の比重が高まった[19]。宮廷関係の人員は城の近くに居住しており、また宮廷の人員は独自の兄弟団（bruderschafft dez hofgesindes）をも結成していた[20]。ハイデルベルク市の都市参事会員の中にも、この兄弟団のメンバーになっている者がおり、宮廷都市としてのハイデルベルク市の性格をうかがわせる。宮中伯フィリップのもとで一五〇〇年に制定された調理所規則 Küchenordnung は、宮廷で宮廷構成員に供される食材について規定しているが、高価な香辛料などの管理を強め、コストを削減しようという君主側の意向を示している[21]。

以上のような、中世後期におけるハイデルベルクの発展は、君主の宮廷を中心とする領邦支配の発展を反映する現象であった。その際、領邦君主のもとでの官庁の形成にとどまらず、宮廷の維持とそこでの儀式、宗教的・学問的中心の確立といった幅広い中心地機能が集積されていったのであった。狭義の領邦支配の外へ放射される影響力を含めて、宮廷所在地には宮中伯の支配の広がりが映し出されていたのである。

（g）文化的中心としての宮廷

ハイデルベルクで展開される文化活動もまた、プファルツ領邦とその影響力の発展を示す一つの指標である。特に、一五世紀後半の宮中伯フリードリヒ一世およびフィリップのもとで、ハイデルベルクのプファルツ宮廷はドイツにおける初期人文主義の中心の一つとなった[22]。

既に一四世紀末以来、宮廷において、宮中伯やその妻のための翻訳や写本作成が行われたことが知られている。ルートヴィヒ三世は、一五〇以上の神学・法学・医学関係の写本を持ち、このコレクションは彼の死後ハイデルベルク大学に遺贈されて大学蔵書の重要な部分を構成することになった。フリードリヒ一世も、一〇〇以上の写本を含むコレクショ

ンを有し、その四分の一は古典作家の作品であった。[23] 一五世紀後半には、君主子弟の教師としても、学者が招かれた。

フリードリヒ一世のもとで、ペーター・ルーダー Peter Luder、ペトルス・アントニウス・デ・クラピス Petrus Antonius de Clapis、ヤーコプ・ヴィムプフェリング Jakob Wimpfeling などの人文主義者が宮廷で活動した。彼らはフリードリヒの地位と行動を正当化するための文筆活動をも展開した。[24] このうち、ペーター・ルーダーは、ハイデルベルク大学で自由学芸を学んだ後、イタリアへ向かい、フェラーラで特にヴェローナのグアリーノ Guarino に学んだ他、パドヴァ大学でも勉学した。[25] 彼は一四五六年にフリードリヒ一世によってハイデルベルクに招かれる。その人文主義的学風は、ハイデルベルク大学の学者たちからは抵抗を受けるが、宮廷では支持者を見いだした。[26] 一四五八年には、フリードリヒ一世のための称賛演説を発表し、[27] 一四六〇年にも宮中伯のために別の詩を作るが、[28] 同年のうちにハイデルベルクから去った。

また、北イタリアのリグリア出身のペトルス・アントニウス・デ・クラピスは、人文主義者マリオ・フィレルフォ Mario Filelfo に学び、一四六四年からバーゼル大学の自由学芸学部で教え、翌一四六五年には同大学でローマ法の学位も取得した。[29] しかし彼は、既に同年のうちにハイデルベルクに移り、宮中伯フリードリヒ一世に仕えた。彼は既に一四六四年にフリードリヒに君主鑑を献呈していた。[30] ペトルスはフリードリヒ一世の宮廷で、その人文主義的学識を生かして地歩を占めた他、[31] 特に教皇庁への使節として何度も派遣された。[32]

宮中伯フィリップの宮廷もまた、人文主義者の活動の舞台となった。コンラート・ケルティス Conrad Celtis は、一四九五年にハイデルベルクで、イタリア各地の手本にならってドイツで初めての人文主義アカデミーを設立した。[33] ヤーコプ・ヴィムプフェリングも、一四九八年に、宮中伯フィリップの息子フィリップおよびルートヴィヒ五世に献呈した君主鑑を執筆した。[34] それまで主にヴュルテンベルクの宮廷で活動していたヨハネス・ロイヒリン Johannes Reuchlin も、

宮中伯フィリップの息子たちの教師としてハイデルベルクに迎えられ、書記局長 Kanzler のヨハン・フォン・ダルベルク Johann von Dalberg をはじめとする人文主義者たちと交際した[35]。

君主本人以外には、書記局長のルートヴィヒ・フォン・アスト Ludwig von Ast、マティアス・ラムング Matthias Ramung、前述のヨハン・フォン・ダルベルクらが人文主義者サークルの援助者であった[36]。

またマティアス・フォン・ケムナート Matthias von Kemnath、ミッヒェル・ベハイム Michel Beheim、ラインボルト・シュレヒト Reinbold Slecht らによる、宮廷とその周辺で成立した歴史叙述も、宮中伯フリードリヒ一世のために実用的機能を果たした[37]。例えば、マティアス・フォン・ケムナートの年代記は、帝国史・教会史・地方史に関する記述と系譜的情報によって、プファルツの帝国・教会政策に歴史的根拠素材を提供し、フリードリヒ一世の問題含みの支配掌握を正当化して、それを皇帝フリードリヒ三世やその他のプファルツの敵対者からの攻撃から擁護する機能を果たしたのであった[38]。また、プファルツ宮廷では一五世紀初めから、宮廷合唱隊 Hofkantorei の存在が史料上確認され、一五世紀後半のフリードリヒ一世の時代には、宮中伯は質の高い合唱隊を宮廷に抱えていた他、当時先進的であった低地地方の音楽家たちをも宮廷に迎えていた[39]。

一四七四年に上プファルツ Oberpfalz のアムベルク Amberg で行われた宮中伯後継者フィリップとバイエルン・ランズフート公ルートヴィヒ（富裕公）Ludwig der Reiche の娘マルガレーテとの結婚式は、この時代のプファルツ宮廷の最も華やかな儀式の一つであった[40]。この機会に、フィリップの上プファルツでの宮廷のために宮廷条令 Hofordnung も制定されている[41]。

こうしてプファルツ宮廷は、特に一五世紀後半において、文化的中心としても旺盛な活力と高い威信を示したのであった。このような宮廷を維持・展開することは、狭義の領邦にとどまらず、領邦外に広がるライン宮中伯の政治的影響力

にとっても、少なからぬ意味を持ったものと考えられる。

（二）ハイデルベルク大学

ハイデルベルク市とプファルツ宮廷の発展にとって、一三八六年にハイデルベルク大学が設立されたことは、大きな意義を持った[42]。全体として見た場合、大学の存在は、既に述べたハイデルベルクの宮廷所在地としての発展とプファルツ宮廷における統治の学識化傾向を促進したのである。

大学創設には、一三七八年の教会大分裂の勃発という全ヨーロッパ的事件が規定的に作用した[43]。フランスとパリ大学が当初アヴィニヨンの教皇を支持したのに対して、ローマ支持のドイツ出身の教師・学生はパリを離れ、別に活動の場を求めた。この動向を背景に、宮中伯ループレヒト一世は、ハイデルベルクでの大学創設を企図した。ローマの教皇ウルバヌス六世の創立特権状[44]は一三八五年一〇月に作成され、一三八六年六月に宮中伯のもとへもたらされた。実際に講義が開始されたのは同年一〇月のことであった[45]。設立に際しては、例えば領邦統治にあたる官吏を養成するといった「実務的」目的ではなく、既に大学を擁していたルクセンブルク家のプラハやハープスブルク家のヴィーンに対抗して家門の威信を高めるという側面が、強く作用したものと考えられる[46]。ハイデルベルク大学の創設も、その意味で、中世後期ドイツの領邦における君主家門という要素の重要性を示す現象と言えるであろう。

教師として大学設立を主導したのは、パリで教えていたマルシリウス・フォン・インゲン Marsilius von Inghen であった[47]。当初の大学の組織はパリを模範とするものだったが[48]、一三八六年から活動を始めたのは神学部と自由学芸学部で、法学部と医学部の開始はやや遅れたようである。またパリ・モデルはその後、ハイデルベルクの実情に合わせて修

正され、例えば同郷団 natio システムは廃止され、学頭 rector は自由学芸学部のみからでなく、四学部から選ばれるようになった。[49]

大学の財政的基盤は、一三九八年にシュパイアー、ヴォルムスなどの八つの教会の合計一二の参事会員聖職禄がローマの教皇ボニファティウス九世の特権状により大学に統合され、[50]また一四一三年にハイデルベルクの聖霊参事会教会 Heiliggeiststift の九つの参事会員聖職禄が大学のために確保されるなどして、[51]拡充された。それに伴い、設立当初は三人にすぎなかった教師陣も増員され、一四一三年以後には、神学部三、法学部三、医学部一、自由学芸学部六の講座を数えるに至った。[52]最初の世代の教師たちは、前述のようにパリからやってきた他、ドイツ人とチェコ人の対立が激しくなっていたプラハ大学からも数多く移ってきており、[53]教師陣の面でハイデルベルクがこの対立からも利を得たことがうかがわれる。法学部でローマ法の講座が正式に設けられたのは、ドイツの大半の大学と同様かなり遅く、一四五二年になってからであった。[54]

ハイデルベルクを訪れる学生の数は、ドイツ各地における大学新設にも影響されて、創立当初を除けばドイツの大学の中でも少ない方であり、[55]また多くの大学所在地と同様、学生と市民との間の対立も絶えなかったとはいえ、[56]大学の存在はハイデルベルク市の発展にとって重要な刺激となった。[57]また、ハイデルベルク大学の教師たちは、既に見たように、宮中伯宮廷の顧問などとして宮中伯の統治を支え、とりわけ一五世紀に進展した政治・外交の学識化の中で、宮中伯にとって不可欠の存在になっていった。このような意味で、ハイデルベルク大学は宮中伯支配の基盤の一つとなったのである。それに対応して宮中伯の側も、時に積極的に大学へ介入した。例えば宮中伯フリードリヒ一世は、一四五二年に大学の組織や教育を改革し、名目論と実在論の対立に関して両派の同権の確保につとめた。[58]この宮中伯のもとで、ハイデルベルク大学は、教師の構成、学生の出身地と学業後の活動先などの点で、近世的な領邦大学としての性格を強

めていくことになった[59]。また彼は、前述のように、ペーター・ルーダーをハイデルベルク大学に招聘したが、大学では一部の教師が人文主義を受け入れたに過ぎず、プファルツにおける人文主義は既述のように宮廷を拠点に展開したのであった[60]。

（三）アムト制と地方行財政

中世後期ドイツの領邦において、君主が有する諸権利・諸収入は、次第にアムトと呼ばれる単位にまとめられて管理されるようになり、それぞれのアムトは空間的にも徐々に管轄の境界を有するようになっていった[61]。そのような展開によって、領邦君主の支配は時間をかけながらもより深く社会の下の層へ及んでいくこととなった。

プファルツの支配拡大にとって、王権からの質入れが非常に大きな意味を持っていたことは前述したが、宮中伯はそれ以外にも、近隣勢力からの質入れや購入により、支配を拡大していった[62]。例えば一三四九年には、ブレッテン Bretten がエーバーシュタイン Eberstein 伯から購入され[63]、一三五八年までにはジンメルン Simmern がラウグラーフ Raugraf から獲得された[64]。一三七〇年にはラーデンブルク Ladenburg の半分が、ヴォルフ・フォン・メッケンハイム Wolf von Meckenheim ら下級貴族たちから購入され[65]、その他、ボランデン Bolanden およびツヴァイブリュッケン Zweibrücken 伯領の半分などが獲得された[66]。このように集積されていった土地支配、その他の収入源、地方における裁判権[67]などは、プファルツでもアムトにまとめられていく[68]。アムトには、名称はさまざまだが、家人や貴族出身の責任者が置かれ、宮中伯を代理した。

地方行財政の役職としては、既に一三世紀前半からハイデルベルクのフォークト Vogt の存在が知られる[69]。また

一二六二年にはノイシュタット Neustadt a. d. Haardt（a. d. Weinstraße）のフォークトが史料に登場する。[70] これとは別に一三世紀後半には、ラインのヴィッツトゥーム Vitztum がライン地方全体における宮中伯の代理人として登場する。[71] とりわけ一二八〇、九〇年代には、ハインリヒ・フォン・ザクセンハウゼン Heinrich von Sachsenhausen がラインのヴィッツトゥームとして活動している。[72] ルードルフ一世のもとでも、ゴットフリート・デア・パウラー Gottfried der Pauler をはじめとして、何人かのラインのヴィッツトゥームが任命された。[73] これらのヴィッツトゥームは君主の分身として、司法・軍事・財務上の統治行為を行った。[74] また、ルードルフ一世のもとで、ハイデルベルク、ノイシュタット、リンデンフェルス Lindnfels、バッハラッハ Bacharach のフォークトが史料に登場する。[75]

一三二九年のパヴィア条約の後、おそらくラインのヴィッツトゥームはハイデルベルクのヴィッツトゥームとなり、一三三三年にはそれと並んでノイシュタットのヴィッツトゥームが登場する。[76] その後ハイデルベルクのヴィッツトゥームは、クネーベル Knebel、エアリッヒハイム Erligheim、ローゼンベルク Rosenberg などの家系により、[77] ノイシュタットのそれは、クネーベル、ヒルシュホルン Hirschhorn、ラントシャート・フォン・シュタイナッハ Landschad von Steinach、ジッキンゲン Sickingen などの家系により占められた。[78] 宮廷役職や顧問の所で既に見たような、ライン宮中伯と関係の深い下級貴族、特にクライヒガウ Kraichgau の下級貴族が、こうした地方役職の面でも重きをなしていたわけである。他に一三五〇年代にはアルツァイ Alzey のヴィッツトゥームが登場する。[79] これらのヴィッツトゥームも、やはりそれぞれの地点において宮中伯本人の分身の役割を果たし、収入徴収と管理、司法、軍事などの分野で活動した。[80] ループレヒト一世のもとでは、ブレッテン、ゲルマースハイム Germersheim、ハイデルベルク、リンデンフェルス、モスバッハ Mosbach などの地点でフォークトが登場する。[81] 他に、特に財務を担当し、またヴィッツトゥームの代理や文書の保管にもあたった地方書記 Landschreiber が、ハイデルベルク、ノイシュタット、オッペンハイムで知ら

れる。[82]

このようなアムトを通じた地方行財政のために、さまざまな文書も作成・運用された。最古の所領台帳 Urbar として、一三六九年のものが伝わっている。[83] いわゆるハイデルベルクのアムト台帳 Heidelberger Amtsbuch で、ハイデルベルクとブレッテンを除くライン右岸における宮中伯の諸権利・諸収入を記載しているが、おそらく未完に終わったものと考えられている。

ヴィッツトゥーム、フォークト、および後述の流通税徴収にあたった税関吏 Zöllner らの地方役人は、遅くとも一四世紀後半には、宮中伯に会計報告を行うよう求められていたらしい。また宮中伯の方は、もたらされた収入について受取証を発行したようである。そのような宮中伯と地方役人とのやりとりにおいて、決算の結果、（役人が任期中自己の出費で活動していたために）宮中伯の方が役人に対して債務を負った状態になっている例が見られるのは、中世後期の統治の実情をうかがわせる現象と言える。[84] またループレヒト一世のもとで、一般の地方役人の会計報告が現地で行われたのに対して、流通税関係の報告はハイデルベルクでなされており、財務管理分野における集権化傾向として注目される。[85] もっとも、プファルツ中央において財務機関が確立するのは、前述のように一五世紀後半になってからであった。

城塞も、プファルツの地方統治にとって本質的な重要性を持っていた。[86] 宮中伯は、後述のようなレーンとして授与する城塞とは別に、自前の城塞を獲得・建設・保持した。城塞の責任者として、アルツァイ、アルテン・バウムブルク Alten-Baumburg、カウプ Kaub、エーレンブルク Ehrenburg、フュルステンベルク Fürstenberg、ゲルマースハイム、ゴレンフェルス Gollenfels、ハンマーシュタイン Hammerstein、ヘムスバッハ Hemsbach、ループレヒツエック Ruprechtseck、シュタールベルク Stahlberg、シュターレック Stahleck、シュトルツェンエック Stolzeneck、シュトロムベルク Stromberg、トリーフェルス Trifels、ヴァッヒェンハイム Wachenheim、ヴィルトベルク Wildberg の各城で

ブルクグラーフ Burggraf の存在が知られる[87]。特に、カウプ、フュルステンベルク、シュタールベルク、シュトロムベルクのブルクグラーフは比較的多くの史料に登場している。

これらの城塞には、主に下級貴族がブルクマンの地位を占め、ブルクレーンなどを得て、見返りに城塞守備にあたった。ブルクレーンの受領は、本来城塞駐屯の義務を伴ったが、一四世紀には緩和されて、駐屯の代理も許容された[88]。ループレヒト一世のもとでは、アルツァイ、バッハラッハ Bacharach、カイザースラウテルン Kaiserslautern、カウプ、キルケル Kirkel、フュルステンベルク、ゲルマースハイム、ハビッツハイム Habitzheim、ハッツハイム Hatsheim、ハイデルベルク、ヘルツォークシュタイン Herzogstein、リンデンフェルス、レーヴェンシュタイン Löwenstein、ノイエンブルク Neuenburg、オッペンハイム Oppenheim、オーデルンハイム Odernheim、プファルツグラーフェンシュタイン Pfalzgrafenstein、シュヴァープスブルク Schwabsburg、シュタールベルク、シュターレック、シュトラーレンベルク Strahlenberg、シュトロムベルク、ザウアーブルク Sauerburg、ヴァインハイム Weinheim、ヴィースロッホ Wiesloch、ヴォルフスベルク Wolfsberg でプファルツのブルクマンの存在が確認される[89]。

ライン宮中伯の地方支配は、一五世紀後半のフリードリヒ一世の時代に、彼のもとでの支配領域の拡大[90]と平行して更に発展し、かなりの程度統一化がすすめられた[91]。ヴィッツトゥーム職の名称はいくつかの地点で維持されたが、その地位は今や他の地点におけるアムトマンと同列になった。合計一八のアムトは、オーバーアムト Oberamt とアムトという二段階に整備され、当初は財政分野を担当した市民出身の地方書記 Landschreiber の役割が貴族出身のアムトマンに対して増大し、次第に地方書記がアムトにおける実質的な責任者となった[92]。

フリードリヒ一世はまた、地方支配の末端において、管轄などの点で均質な村落裁判所の設立につとめた[93]。村落裁判所は、宮中伯の狭義の土地支配に対してだけでなく、他の領主の所領に対しても管轄権を主張した。村落裁判所に対す

る支配権は、なおかなりの地点で別の領邦君主などによってプファルツと共有されていたが、宮中伯はその排除をすすめていった。[94] もっとも、オーバーアムト・アルツァイのようにプファルツの稠密な支配が建設された所でも、なお近世に至るまで、プファルツが他の領主と村落裁判所支配権を共有する地点が残っていたことにも注意が必要であろう。[95] プファルツ領邦支配の「オープンな」性格は、このような点にもあらわれているのである。しかしそれでも、村落裁判所の重要性が増すことにより、土地領主裁判所（いわゆるHubgericht）において裁判権をも行使していた宮中伯以外の聖俗土地領主の支配権は次第に縮減されていった。[96] また、平行して、農村ゲマインデの形成も完結していき、村落住民は農村ゲマインデを単位として領邦臣民に組織されることとなった。[97]

村落裁判所は民事事件の他、下級の刑事事件をも管轄した。重大な刑事事件はライン左岸ではアムトマンの管轄であったが、ライン右岸の多くの地域ではツェント裁判所Zentgerichtで扱われた。[98] これらのツェント裁判所については、プファルツの関与のもとで既に一四三〇年に、宮中伯を裁判君主と宣言する法判告Weistumが出されていたが、[99] 一五世紀末までにはおおむね宮中伯の影響下に置かれた。宮中伯は、ツェントにおける法判告や証言聴取を通じて、マインツ大司教、シュパイアー司教、エアバッハ家など、隣接する領邦君主に対して自己の支配領域を画定し、支配権を確立する政策をすすめていった。[100]

都市もまた、中世後期ドイツの領邦における地方支配の強化にとって、少なからぬ意味を持った。[101] 宮中伯は、いくつかのアムト中心地点などで都市育成政策を展開した。[102] 宮中伯ルートヴィヒ二世のもとで、一二六四年頃にヴァインハイムの新市Neustadtが建設され、一二七五年には既に都市化しつつあったノイシュタットのために国王ルードルフ一世の特権状が、[103] 一二七七年にはやはり都市化の過程にあったアルツァイのために同国王の特権状が獲得された。[104] またループレヒト一世は、一三五六年にバッハラッハに都市参事会を設置した。[105] ここではケルン大司教がグルントヘルシャフト

を持ち、宮中伯はフォークタイのみを持つという複雑な状況が存したが、その中で都市参事会の登場は、大司教のシュルトハイス Schultheiß とその裁判所の権力を排除し、プファルツの支配を強化することにつながった。また、とりわけ一四世紀後半にハイデルベルク市の発展が宮中伯によって促進されたのは、前述のとおりである。

これらの都市は、城のブルクマンと貴族たちの存在が無視できない意味を持っていた都市（アルツァイ[106]、バッハラッハ）とそうでない都市（ノイシュタット）という違いはあっても、概して宮中伯の強力な支配のもとに置かれた[107]。宮中伯の代理人であるシュルトハイスが、都市を支配し、裁判を主催した。これに対して、都市を拠点とするヴィッツトゥーム、フォークト、アムトマンなどは、主に都市外の農村部の権益を管理した。もちろん他方で、これらの都市では市民団体の都市参事会が形成されるが、シュルトハイスの裁判所に対する参事会独自の裁判権はあまり発達しなかった。参事会員は、同時にシュルトハイス裁判所の参審人を兼ねた。特に宮廷所在地となったハイデルベルクでは、前述のように、宮中伯が市長と都市参事会員の任免権を掌握していた。またプファルツ支配下の都市でツンフトが都市制度上大きな役割を果たすことは、ほとんどなかった。

更にフリードリヒ一世とフィリップのもとで、宮中伯の都市支配は強化され、とりわけ財政面での都市把握がすすんだ。宮中伯は都市の担税力を増し、周囲から人を都市へ引きつけるために、都市の特権を確認し、あるいは新たに年市特権などを与えた[108]。それと平行して都市における宮中伯役人の権限拡大もはかられた。フリードリヒは、一四五〇－六〇年代に、アルツァイ、バッハラッハ、ハイデルベルクに特権状を発行し、従来の租税から免除する代わりに、都市で徴収される消費税 Ungeld の一定割合を宮中伯に納めさせた。もっとも、プファルツの支配はこの時点では都市参事会を通じてのもので、個々の市民を直接把握しようとはしていなかった[109]。このような財政的要求に対して、一四八〇年代のノイシュタットの騒擾のように抵抗が起きることもあったが、そのような動きは例外的であった[110]。ただし、オッペ

ンハイム Oppenheim、オーデルンハイム Odernheim のような、もともと国王領に属し、質入れを経てプファルツ支配下に入ったような都市では、宮中伯の都市支配に対して市民側からの比較的強い抵抗が見られた[111]。

全体として、プファルツ領邦内の諸都市は、宮中伯による保護と育成を享受する一方で、宮中伯により掌握され、市民団体による都市自治の展開も狭い枠内にとどまった。そうした状態にあった諸都市が、支配中心として、また軍事・財政上の貢献の点で、領邦支配確立のために果たした役割は無視できないものがあったのである。

（四）教会政策

中世後期ドイツの諸領邦の君主は、教会分野においても、徐々に支配権を強化していった[112]。プファルツ系ヴィッテルスバッハ家と教会・修道院との関係をみると[113]、一三世紀から宮中伯は、シェーナウ Schönau、ルーペルツベルク Rupertsberg、エーバーバッハ Eberbach、オイサータール Eußerthal、オッターベルク Otterberg などいくつかの修道院に特権を与えている[114]。一四世紀以降も、オッターベルク、シェーナウ、ローベンフェルト Lobenfeld、ゲルマースハイム Germersheim、フランケンタール Frankental、リンブルク Limburg、ヒルザウ Hirsau、マウルブロン Maulbronn など領内・領外の修道院の保護者として登場したり、その財産の保全に配慮したりすることは、しばしば見られた[115]。このうち、もともと王権の保護下にあったマウルブロン修道院は、一三七〇年代に皇帝カール四世により、期限付きで宮中伯の保護に委ねられ、その後プファルツの領邦支配に組み込まれていった[116]。

宮中伯による、ノイシュタットにおける参事会教会 Stiftskirche の設定や、ハイデルベルクにおける聖霊参事会教会 Heiliggeiststift の寄進と建設については、墓所の項目で既に言及したところである[117]。

宮中伯の教会への影響力行使のルートとして、一つには、宮中伯が持つ保護権 Patronatsrecht が考えられる。一四九八年に宮中伯フィリップが作成させたリストに、上プファルツを含めた一覧が記録されているが、ヴォルムス司教区やシュパイアー司教区における聖職禄の全体数およびそこにおける保護権の保有者全体と比較すると、プファルツ保有分は数量的にはそれほど多くない。ヴォルムス司教区では全体の二割以下（三七六中三四）である。[118] しかし、同リスト冒頭には、プファルツの保護権により職を得た聖職者が行うべき宣誓の文言、プファルツによる推薦の書式、聖職禄の管理についての宮中伯の役人達への指令が記されており、[119] 宮中伯による保護権把握強化の動きをうかがわせる。その他、フリードリヒ一世以降、教区司祭人事の掌握も進展した。

ライン宮中伯の教会政策は、中世後期にすすめられた修道院改革とも連動していた。[120] 宮中伯ルートヴィヒ三世とルートヴィヒ四世は、ヴォルムス近郊のドミニコ会女子修道院リーベナウ Liebenau、ホーホハイム Hochheim、ヴォルムスのドミニコ会修道院、ヴォルムスの郊外 Vorstadt のシトー会修道院ノンネンミュンスター Nonnenmünster、ヴォルムス近くのキルシュガルテン Kirschgarten 女子修道院などの修道院改革を後援した。[121] 最後のケースでは、宮中伯は、ヴィンデスハイム改革 Windesheimer Chorherrenreform の動きを支援した。[122] キルシュガルテンからは、広い範囲の修道院に改革の刺激が及んだ。[123]

フリードリヒ一世のもとでも、宮中伯による修道院改革の支援と修道院把握の強化がパラレルにすすんだ。フリードリヒは、ブルスフェルト改革 Bursfelder Reform による、クリンゲンミュンスター Klingenmünster、シュポンハイム Sponheim、ヴァイセンブルク Weißenburg などの修道院の改革を後援するとともに、それを通じて修道院内部の関係にも介入した。[124] ブルスフェルト改革は、宮中伯フィリップのもとでも、リンブルク、ゼーバッハ Seebach、オーデンハイム Odenheim、ゲルマースハイムなどで行われた。[125]

このように、とりわけ一五世紀に入って、ライン宮中伯の教会・修道院把握は、中世後期の修道院改革運動のような領邦外にも広がった動向とも結びつきながら、強化される傾向にあり、大きく見れば、近世の教会統治の基礎が築かれつつあったのである。

（五）軍制

プファルツの軍制も、特に一五世紀に入って組織化が進んだ。この分野については、既に我が国でも皆川卓氏の論考[126]があるので、ここでは概要の確認にとどめよう[127]。

ライン宮中伯の軍事力は、中世後期の間にレーン制度による動員を主力とするものから次第に変質していった[128]。一五世紀後半、宮中伯フリードリヒ一世のもとでは、レーン軍の他に、スイスなどから集められた傭兵が用いられた。また、防衛戦争の場合には、農民・市民の召集軍の動員も試みられた他、農民や修道院は当時いわゆる車陣などの形で頻繁に用いられた戦闘用の車の供出を義務づけられた。フリードリヒの砲兵隊は当代屈指の強力な部隊で、マルティン・メルツ Martin Merz などの専門家がプファルツに仕えていた。騎兵は今なおレーン制によって動員された貴族によって構成されており、クライヒガウなどの下級貴族たちがプファルツの騎兵として活躍した。フリードリヒ一世は、農民・市民の召集軍を除いて、およそ一五〇〇の兵力を擁し、その約五分の一がレーン軍であった。このようなかなりよく整った軍が、彼の軍事的成功を支えたのである。

ランズフート継承戦争に際してのプファルツの軍備は、一五〇四年の動員台帳 Reißbuch から知られる[129]。これは、このときプファルツが領内から動員した兵力、および臨時に雇い入れるなどした兵力の記録であり、またプファルツ側お

よび敵側のフェーデ宣告状 Fehdebriefe もあわせて収録している。後述するように狭義の領邦支配に限定されず幅広く展開していたレーン関係により動員された下級貴族らの兵力の他に、傭兵や、約六〇〇〇人の農村・都市からの動員が記録されている。

このように、一六世紀初頭の時点では、ライン宮中伯の軍事力は封建騎士軍だけでなく、より多様な要素を含むものとなっていた。もっとも、そこでもなお領邦を越える範囲から集まった貴族たちがプファルツ軍を構成したことには注意が必要であり、広い影響圏をかかえたプファルツの覇権的地位の反映をそこに見ることができるのである。

（六）領邦立法

中世後期ドイツの諸領邦では、領邦君主による立法活動も展開され始める。[130] 既に詳しく論じた支配相続関係の規制を別にすれば、ライン宮中伯の領邦立法が活発になるのは、他の多くの領邦と同様、一五世紀後半からのことである。[131] これも前述した宮廷裁判所条令の他は、対象分野としては経済関係の立法が中心であったが、他に奢侈立法や相続関係の立法もなされた。

例としては、一四六五年のハイデルベルク市についての都市条令があるが、[132] その経済生活関係の内容は、一四七五年のフリードリヒ一世の価格統制法で全支配領域に広げられた。また一四六五年のノイシュタット市についての奢侈条令も伝わっている。[133] その他、賭博禁止などを定めた条令も、やはり一四六五年に出されている。[134] 相続については、一四八四年に代襲相続を認める立法が出されたが、これはローマ法の ius representationis を承認するものであった。[135]

このように、プファルツにおける領邦立法は、中央における裁判所や財務役職の整備などとともに、ようやく一五世

紀後半になって目に見えて進展し、そのまま近世の立法活動へと接続していくのである。

（1）中世後期ドイツの領邦における宮廷所在地 Residenz 形成について、一般的には、Ernst Schubert, Fürstliche Herrschaft und Territorium im späten Mittelalter (Enzyklopädie Deutscher Geschichte, Bd. 35), München 1996, S. 77 ff. 先駆的研究として、Hans Patze, Die Bildung der landesherrlichen Residenzen im Reich während des 14. Jahrhunderts, in: Wilhelm Rausch (Hg.), Stadt und Stadtherr im 14. Jahrhundert. Entwicklungen und Funktionen, (Beiträge zur Geschichte der Städte Mitteleuropas 2), Linz 1972, S. 1-54 (Peter Johanek u. a. (Hg.), Ausgewählte Aufsätze von Hans Patze, (Vorträge und Forschungen, Bd. 50), S. 729-788 にも収録); Ders. und Gerhard Streich, Die landesherrlichen Residenzen im spätmittelalterlichen deutschen Reich, in: BDLG 118 (1982), S. 205-220 (P. Johanek, a. a. O., S. 789-805 にも収録). 国王および諸侯の Residenz のハンドブックとして、Werner Paravicini (Hg.), Höfe und Residenzen im spätmittelalterlichen Reich. Ein dynastisch－topographisches Handbuch. Teilbd. 2: Residenzen, (Residenzenforschung, Bd. 15. Ⅰ), Ostfildern 2003. 問題群の概観として、Andreas Ranft, Residenz und Stadt, in: Werner Paravicini (Hg.), Höfe und Residenzen im spätmittelalterlichen Reich. Bilder und Begriffe. Teilbd. 1: Begriffe, (Residenzenforschung, Bd. 15. Ⅱ), Ostfildern 2005, S. 27-32 および Jörg Wettlaufer, Zwischen Konflikt und Symbiose. Überregionale Aspekte der spannungsreichen Beziehung zwischen Fürstenhof und Stadt im späten Mittelalter und in der frühen Neuzeit, in: W. Paravicini u. Ders., (Hg.), Der Hof und die Stadt. Konfrontation, Koexistenz und Integration in Spätmittelalter und früher Neuzeit, (Residenzenforschung, Bd. 20), Ostfildern 2006, S. 19-33. 個別研究としては、Ebenda 所収の諸論文および Jan Hirschbiegel u. a. (Hg.), Städtisches Bürgertum und Hofgesellschaft. Kulturen integrativer und konkurrierender Beziehungen in Residenz- und Hauptstädten vom 14. bis ins 19. Jahrhundert, (Residenzenforschung, Bd. 25), Ostfildern 2012 所収の諸論文の他、例えば、Konrad Amann, Die landesherrliche Residenzstadt Passau im spätmittelalterlichen deutschen Reich, (Residenzenforschung, Bd. 3), Sigmaringen 1992; Dieter Kerber, Herrschaftsmittelpunkte im Erzstift Trier. Hof und Residenz im späten Mittelalter,

(Residenzenforschung, Bd. 4), Sigmaringen 1995; Christian Lackner, Hof und Herrschaft. Rat, Kanzlei und Regierung der österreichischen Herzöge (1365-1406), (Mitteilungen des Instituts für Österreichische Geschichtsforschung, Ergänzungsbd. 41), Wien/München 2002, S. 179-217; 他に論文集として、Peter Johanek (Hg.), Vorträge und Forschungen zur Residenzfrage, (Residenzenforschung, Bd. 1), Sigmaringen 1990; Klaus Neitmann und Heinz－Dieter Heimann (Hg.), Spätmittelalterliche Residenzbildung in gesitlichen Territorien Mittel- und Nordostdeutschlands, (Studien zur brandenburgischen und vergleichenden Landesgeschichte, Bd. 2), Berlin 2009. 今日のドイツ語圏外でのResidenz形成については、Hans Patze und Werner Paravicini (Hg.), Fürstliche Residenzen im spätmittelalterlichen Europa, (Vorträge und Forschungen, Bd. 36), Sigmaringen 1991. 近世・近代まで含めて、Volker Press (Hg.), Südwestdeutsche Bischofsresidenzen außerhalb der Kathedralstädte, (Veröffentlichungen der Kommission für geschichtliche Landeskunde in Baden-Württemberg, Reihe B: Forschungen, Bd. 116), Stuttgart 1992; Kurt Andermann (Hg.), Residenzen. Aspekte hauptstädtischer Zentralität von der frühen Neuzeit bis zum Ende der Monarchie, (Oberrheinische Studien, Bd. 10), Sigmaringen 1992. 中世後期の神聖ローマ帝国におけるResidenz形成について、日本の研究としては、千葉徳夫「中世後期テューリンゲンにおける建設都市について―ヴァイマルを中心として―」『法律論叢』五九巻五・六号（一九八七年）五一―一九六頁、同「中世末―近世の宮廷所在都市ヴァイマル」『社会科学研究』（明治大）二八巻二号（一九九〇年）一九五―二一九頁、薩摩秀登「帝国の「中心都市」プラハ」『一橋論叢』一一〇巻四号（一九九三年）六五五―六六七頁。

（2）Meinrad Schaab, Die Entstehung des pfalzgräflichen Territoriums am unteren Neckar und die Anfänge der Stadt Heidelberg, in: ZGO 106 (1958), S. 233-276, S. 253-276; Ders., Die Anfänge Heidelbergs. Alte Zeugnisse und neue Befunde im Rahmen der stauferzeitlichen Stadtgenese in Südwestdeutschland, in: Eugen Reinhard und Peter Rückert(Hg.), Staufische Stadtgründungen am Oberrhein, (Oberrheinische Studien, Bd. 15), Sigmaringen 1998, S. 185-212; Hermann Ehmer, Heidelberg. Residenz der Pfälzer Kurfürsten bis 1720, in: Kurt Andermann(Hg.), Residenzen（注1）, S. 297-321; Arnold Scheuerbrandt, Heidelbergs Aufstieg und Niedergang in kurpfälzischer Zeit. Gründung und Entwicklung von der „churfürstlichen Residenzstat“ zur „zweiten Haupt- und ehemaligen Residenzstadt“, in: Elmar Mittler(Hg.), Heidelberg. Geschichte und Gestalt, Heidelberg 1996, S. 48-87; Johann Kolb, Heidelberg. Die Entstehung einer landesherrlichen

Residenz im 14. Jahrhundert, (Residenzforschung, Bd. 8), Sigmaringen 1999; Achim Wendt und Manfred Benner, Das Heidelberger Schloss im Mittelalter. Bauliche Entwicklung, Funktion und Geschichte vom 13. bis zum 15. Jahrhundert, in: Volker Rödel (Red.), Mittelalter. Der Griff nach der Krone. Die Pfalzgrafschaft bei Rhein im Mittelalter, Regensburg 2000, S. 165-181; Wolfgang von Moers -Messmer, Heidelberg und seine Kurfürsten. Die große Zeit der Geschichte Heidelbergs als Haupt- und Residenzstadt der Kurpfalz, Ubstadt－Weiher 2001, S. 11 ff.; Volker Rödel, Art. Heidelberg, in: Werner Paravicini(Hg.), Höfe und Residenzen im spätmittelalterlichen Reich. Ein dynastisch-topographisches Handbuch, Teilbd. 2: Residenzen, (Residenzenforschung, Bd.15. Ⅰ), Ostfildern 2003, S. 259-262.

（3）ヴィッテルスバッハ家の宮中伯への授封証書として伝わる最古の文書は，一二一五年にヴォルムス司教ハインリヒが宮中伯ルートヴィヒ一世，その妻アグネス，その子オットー二世に与えたものである。Meinrad Schaab (Hg.), Rüdiger Lenz (Bearb.), Ausgewählte Urkunden zur Territorialgeschichte der Kurpfalz 1156-1505, (Veröffentlichungen der Kommission für geschichtliche Landeskunde in Baden-Württemberg, Reihe A: Quellen, Bd. 41), Stuttgart 1998, Nr. 12, „... et vobis et successoribus dictis in feodum concedimus et assignamus ... castrum in Heidelberg cum burgo ipsius castri ...“. M. Schaab, Entstehung（注2）, S. 253 ff.; H. Ehmer, a. a. O.（注2）, S. 297.

（4）ハイデルベルクにはまず宮中伯の城が築かれたが，それに対して都市建設をいつの時点とするかは，現在まで結論を見ない。近年の考古学的調査結果などから一一一四年から一一二五年の間に都市建設がなされたとする Achim Wendt und Manfred Benner, 800 Jahre Heidelberg－Archäologische und bauhistorische Befunde zu den Anfängen der Stadt, in: ZGO 145 (1997), S. 15-60 に対して，M. Schaab, Anfänge（注2）, S. 191 ff. は，一二世紀中の建設の可能性をなお否定しない。

（5）遅くとも一二二〇年代後半にハイデルベルクの市民たちが発行した証書には，既に市の印章が付されている。M. Schaab, Entstehung（注2）, S. 272; Joachim Dahlhaus, Zu den ältesten Siegeln der Städte Heidelberg und Neustadt an der Weinstraße, in: ZGO 147 (1999), S. 113-143, S. 120. ハイデルベルクの都市としての立地条件については，M. Schaab, Entstehung（注2）, S. 255 ff.; Ders., Anfänge（注2）, S. 187 f. ハイデルベルクにおける都市と市民団体の発展史については，M. Schaab, Entstehung（注2）, S. 258 ff.; H. Ehmer, a. a. O.（注2）, S. 305 ff. 一二八七年には都市参事会 consules が史料に現れる。

（6）J. Kolb, a. a. O.（注2）, S. 41 ff. コルプの調査によると、ハイデルベルクでの滞在回数二三四に対して、ゲルマースハイム Germersheim 四三、バッハラッハ Bacharach 三五、ノイシュタット Neustadt 二七などとなっている。なお、Ebenda, S. 42の表からは、ルードルフ一世（および後の国王ルートヴィヒ四世）までの宮中伯が主にバイエルンに滞在していたことも明らかである。しかし彼らの時代でも、ハイデルベルクはライン地方の支配拠点の中では最も頻繁に宮中伯が訪れていた地点であった。

（7）J. Kolb, a. a. O.（注2）, S. 48 ff. この面ではハイデルベルクにおける証書発行数七一〇に対して、ゲルマースハイム七四、バッハラッハ五四、ノイシュタット三〇などとなっている。また、Ebenda, S. 49の表からは、ルードルフ一世（および後の国王ルートヴィヒ四世）までの宮中伯たちについて、やはり滞在頻度の面と同じ所見が得られる。

（8）J. Kolb, a. a. O.（注2）, S. 57 ff. なお、ループレヒト一世が叙述史料などで Herzog von Heidelberg と呼ばれることがあったのは、彼のもとで著しく進展したハイデルベルクの Residenz 化を反映したものと見ることができよう。J. Kolb, a. a. O.（注2）, S. 88 f.

（9）J. Kolb, a. a. O.（注2）, S. 79 f.; Richard Schröder und Carl Köhne (Bearb.), Oberrheinische Stadtrechte. 1. Abt.: Fränkische Rechte, Heidelberg 1895-1922, 5. Heft: Heidelberg, Mosbach, Neckargmünd, Adelsheim, S. 476.

（10）J. Kolb, a. a. O.（注2）, S. 81 ff.; H. Ehmer, a. a. O.（注2）, S. 318 ff.

（11）J. Kolb, a. a. O.（注2）, S. 63 ff.; H. Ehmer, a. a. O.（注2）, S. 307, R. Schröder－C. Köhne, a. a. O.（注9）, S. 473（宮中伯の都市条令 Stadtordnung）, Art. 3. „Kein burgermeister oder rathspersonen ohne Pfalz oder dero beamten vorwissen oder bewilligen nicht setzen oder entsetzen, Pfalz aber mag demselb, wann es sie gut dunkt, thun.“ なお Art. 5. „Kein ordnung und satzung ohne Pfalz vorwissen in der stadt zu machen.“ Ebenda, S. 473 ff.（市民側による都市条令遵守の約束）, Art. 3. „Wir verjehen ouch, daz wir nimmermer eweklichen keinen burgermeister nach ratherren in der stat zu Heydelberg gesetzen noch entzsetzen sollen noch enwollen an unsirs egnanten herren oder siner erben, ob er nit enwere, wiszen odir willen oder siner und siner erben gesworne amptlute von sinen oder siner erben wegen, ob er odir sine erben in lande nit erweren. ouch sal und mag unsir vorgenanter herre odir sine erben, ob er nit enwere, immerme ewicklichen uns die burgermeister und ratherren, die ignote zu Heydilberg sint oder hernach daselbez immerme werdent, setzen

und ensetzen, wan daz unserm egnanten herren odir sinen erben fuget und eben kumet oder in und sinen erben dez dunket, daz ez in odir irre herschefte nutze si.“

（12）J. Kolb, a. a. O.（注2）, S. 56 f.

（13）J. Kolb, a. a. O.（注2）, S. 70 ff. 旧市と新市（拡張部）は今後、単一の裁判所、シュルトハイス、都市参事会のもとに服し、新市の住民も旧市の住民と同様の諸権利を享受するものとされた。R. Schröder－C. Köhne, a. a. O.（注9）, S. 478 ff., Art. 5; M. Schaab－R. Lenz, a. a. O.（注3）, Nr. 88, Art. 5, „Und sol auch furbaz mee in der alten stat und in der nuwen stat ein gericht und ein schultheiß und ein rat sin und sollent die in der nuwen stat alle die recht, gnade und friheit glich haben als die habent, die in der alten stat geseßen sint, ane all geverde.“

（14）前述の文献の他、H. Ehmer, a. a. O.（注2）, S. 315 f.

（15）J. Kolb, a. a. O.（注2）, S. 75 ff.; H. Ehmer, a. a. O.（注2）, S. 300 ff. いわゆるRuprechtsbauの建設などが行われた。城の増築は一六世紀以降一層大規模に続けられていく。

（16）J. Kolb, a. a. O.（注2）, S. 173 f.

（17）J. Kolb, a. a. O.（注2）, S. 207; H. Ehmer, a. a. O.（注2）, S. 306.

（18）Werner Rösener, Die wirtschaftlichen Ressourcen der Fürstenhöfe: Die schwindende Bedeutung der Einnahmen aus den Kammergütern, in: Gerhard Fouquet u. a. (Hg.), Hofwirtschaft. Ein ökonomischer Blick auf Hof und Residenz in Spätmittelalter und früher Neuzeit, (Residenzenforschung, Bd. 21), Ostfildern 2008, S. 305-328, S. 313 ff.; Gabriel Zeilinger, Herrenspeise und Hofversorgung－Der Heidelberger Hof um 1500 als Haushaltsbetrieb, in: Ebenda, S. 475-485. この問題圏一般については、同論文集所収の諸論文の他、Werner Paravicini (Hg.), Höfe und Residenzen im spätmittelalterlichen Reich. Bilder und Begriffe. Teilbd. 1: Begriffe, (Residenzenforschung, Bd. 15. Ⅱ), Ostfildern 2005, S. 33-115. を参照。

（19）W. Rösener, a. a. O.（注18）, S. 316 f.

（20）J. Kolb, a. a. O.（注2）, S. 107 ff.

（21）G. Zeilinger, a. a. O.（注18）, S. 477 ff. なお、一五〇八／〇九年にハイデルベルクの調理所書記Küchenschreiberによって作成・提出された会計報告によれば、宮廷食材関係の出費は当時のプファルツ中央財政で使用可能な金額の九分の一を

占めていた。Ebenda, S. 481 ff.

（22）概観として、Meinrad Schaab, Geschichte der Kurpfalz, Bd. 1: Mittelalter, Stuttgart 1988, S. 208 ff. ハイデルベルク宮廷において展開された学芸活動の諸分野については、Jan－Dirk Müller (Hg.), Wissen für den Hof. Der spätmittelalterliche Verschriftungsprozeß am Beispiel Heidelberg im 15. Jahrhundert, (Münstersche Mittelalter-Schriften, Bd. 67), Münster 1994. 中世後期のプファルツ宮廷における文学活動と宮中伯による保護については、Martina Backes, Das literarische Leben am kurpfälzischen Hof zu Heidelberg im 15. Jahrhundert. Ein Beitrag zur Gönnerforschung des Spätmittelalters, (Hermaea. Germaninsitsche Forschungen, NF Bd. 68), Tübingen 1992 も参照。一九世紀から一一〇世紀初めの文献としては、Karl Hartfelder, Konrad Celtes und der Heidelberger Humanistenkreis, in: HZ 47 (1882), S. 14-36; Ders., Zur Gelehrtengeschichte Heidelbergs am Ende des Mittelalters, in: ZGO 45 (1891), S. 141-171; Jakob Wille, Der Humanismus in der Pfalz, in: ZGO 62 (1908), S. 9-40. ドイツの人文主義について、より一般的には、Gerhard Ritter, Die geschichtliche Bedeutung des deutschen Humanismus, in: HZ 127 (1923), S. 393-453. ハイデルベルク大学と人文主義の関係については、Paul Oskar Kristeller, Scholastik und Humanismus an der Universität Heidelberg, in: Gundolf Keil u. a. (Hg.), Der Humanismus und die oberen Fakultäten, Weinheim 1987, S. 1-20. 人文主義者コンラート・ケルティスと宮中伯フィリップ治下のハイデルベルクの人文主義との関係については、前記のハルトフェルダーの論文以外に、Lewis W. Spitz, Conrad Celtis. The German Arch－Humanist, Cambride (Mass.), 1957, S. 45-54, Tibor Klaniczay, Celtis und die sodalitas litteraria per Germaniam, in: August Buck und Martin Bircher (Hg.), RESPUBLICA GUELPHERBYTANA. Wolfenbütteler Beiträge zur Renaissance- und Barockforschung, Festschrift für Paul Raabe, Amsterdam 1987, S. 79-105, S. 86 f. も参照。その他、本文で取り上げる以外の、ハイデルベルクで活動した人文主義者については、Wilhelm Wattenbach, Samuel Karoch von Lichtenberg, ein Heidelberger Humanist, in: ZGO 28 (1876), S. 38-50; Ders., Werner von Themar, ein Heidelberger Humanist, in: ZGO 33 (1880), S. 1-101.

（23）彼の死（一四七六年）に際しての遺贈から知られる。Gerhard Kattermann, Ein Büchervermächtnis des Kurfürsten Friedrich I. von der Pfalz, in: ZGO 89 (1937), S. 44-57.

（24）Jan－Dirk Müller, Der siegreiche Fürst im Entwurf der Gelehrten. Zu den Anfängen eines höfischen Humanismus in

Heidelberg, in: August Buck (Hg.), Höfischer Humanismus, Weinheim 1989, S. 17-50. また Gerhard Ritter, Aus dem Kreise der Hofpoeten Pfalzgraf Friedrichs I. Mitteilungen aus vatikanischen Handschriften zur Charakteristik des Heidelberger Frühhumanismus, in: ZGO 38 (1923), S. 109-123; Henry J. Cohn, The Early Renaissance Court in Heidelberg, in: European Studies Review 1 (1971), S. 295-322.

(25) Frank E. Baron, The Beginnings of German Humanism: The Life and Work of the Wandering Humanist Peter Luder (Ph. D. California, Berkeley), 1966, S. 8 ff. Peter Luder については、多くの関連史料を伴った Wilhelm Wattenbach, Peter Luder, der erste humanistische Lehrer in Heidelberg, in: ZGO 22 (1869), S. 33-127 も参照。更に Ders., Nachträgliches über Peter Ruder, in: ZGO 27 (1875), S. 95 -99. また Eske Bockelmann (Hg.), Die Metrikvorlesung des Frühhumanisten Peter Luder, (GRATIA. Bamberger Schriften zur Renaissanceforschung, H. 14), Bamberg 1984; Rudolf Kettemann, Peter Luder (um 1415-1472). Die Anfänge der humanistischen Studien in Deutschland, in: Paul Gerhard Schmidt (Hg.), Humanismus im deutschen Südwesten. Biographische Profile, Sigmaringen 1993, S. 13-34; Jan－Dirk Müller, Sprecher-Ich und Schreiber-Ich. Zu Peter Luders Panegyricus auf Friedrich d. S., der Chronik des Mathias von Kemnat und der Pfälzer Reimchronik des Michel Beheim, in: Ders., (Hg.), a. a. O.（注22）, S. 289-321, S. 293 ff. も参照。

(26) F. E. Baron, a. a. O.（注25）, S. 41 ff. Matthias von Ramung, Jodocus Eichmann, Stephan Hoest, Matthias von Kemnat との関係については、Ebenda, S. 48 ff., 75 ff., 84 ff. また Wilfried Barner, “Studia toto amplectenda pectore”. Zu Peter Luders Programmrede vom Jahre 1456, in: A. Buck u. M. Bircher (Hg.), a. a. O.（注22）, S. 227-251 も参照。

(27) F. E. Baron, a. a. O.（注25）, S. 80 ff.; R. Kettemann, a. a. O.（注25）, S. 28 ff.; Wilhelm Wattenbach, Peter Luder's Lobrede auf Pfalzgraf Friedrich den Siegreichen, in: ZGO 23 (1871), S. 21 -38; Ders., Zu Peter Luder's Lobrede auf Pfalzgraf Friedrich den Siegreichen, in: ZGO 33 (1880), S. 439. Matthias von Kemnat によるドイツ語訳については、Karl Maria Baumgarten, Laudes palacii et palatini. Deutsche Lobrede auf Kurfürst Friedrich I. von der Pfalz, in: Römische Quartalschrift für christliche Altertumskunde und für Kirchengeschichte 1 (1887), S. 231-258. 宮廷で成立した君主のための称賛演説の事例として、Markus Müller, Lobreden, in: Werner Paravicini (Hg.), Höfe und Residenzen im spätmittelalterlichen Reich. Hof und Schrift. (Residenzenforschung, Bd. 15. Ⅲ), Ostfildern 2007, S. 505-511.

（28）F. E. Baron, a. a. O.（注25）, S. 94 ff.

（29）Veit Probst, Petrus Antonius de Clapis (ca. 1440-1512). Ein italienischer Humanist im Dienste Friedrich des Siegreichen von der Pfalz, (Veröffentlichungen des Historischen Instituts der Universität Mannheim, Bd. 10), Paderborn u. a. 1989, S. 6 ff. ペトルスについては、また、Gerhard Ritter, Petrus Antonius Finariensis, der Nachfolger Peter Luders in Heidelberg. Ein Beitrag zur Geschichte des Frühhumanismus am Oberrhein, in: Archiv für Kulturgeschichte 26 (1936), S. 89-103; Guido Kisch, Petrus Antonius Finariensis' Lobrede auf Basel, in: Ders., Gestalten und Probleme aus Humanismus und Jurisprudenz. Neue Studien und Texte, Berlin 1969, S. 241-279 も参照。

（30）V. Probst, a. a. O.（注29）, S. 19. この君主鑑の史料編纂として、V. Probst, a. a. O.（注29）, S. 152 ff. またペトルスは、ハイデルベルクの宮廷に移った後、宮中伯の委託を受けて、ブルゴーニュ公シャルルおよびクレーフェ公ヨハンに献呈された君主鑑をも執筆した。史料編纂は、それぞれ、V. Probst, a. a. O.（注29）, S. 177 ff., 213 ff. ペトルスの君主鑑については、Bruno Singer, Die Fürstenspiegel in Deutschland im Zeitalter des Humanismus und der Reformation. Bibliographische Grundlagen und ausgewählte Interpretationen: Jakob Wimpfeling, Wolfgang Seidel, Johann Sturm, Urban Rieger, (Humanistische Bibliothek, Reihe I: Abhandlungen, Bd. 34), München 1981, S. 67 ff. も参照。また中世後期の君主鑑の事例として、Sven Rabeler, Fürstenspiegel, in: W. Paravicini (Hg.), Hof und Schrift.（注27）, S. 329-346.

（31）V. Probst, a. a. O.（注29）, S. 20 ff. ペトルスがプファルツ宮廷の関係者などと交わした書簡の史料編纂として、V. Probst, a. a. O.（注29）, S. 109 ff.

（32）V. Probst, a. a. O.（注29）, S. 40 ff. なお、ペトルスは、宮中伯フリードリヒ一世の死後、なお宮中伯フィリップのもとでしばらく仕えた後、一四八四年以後はマインツ大司教ベルトルト・フォン・ヘンネベルク Berthold von Henneberg のためにも働き、教皇インノケンティウス八世から教皇特使に任命されるなど、当時の帝国・教会政治で重要な役割を果たした。V. Probst, a. a. O.（注29）, S 83 ff., 90 ff.

（33）L. W. Spitz, a. a. O.（注22）, S. 45-54; T. Klaniczay, a. a. O.（注22）, S. 86 ff.

（34）これらの君主鑑については、B. Singer, a. a. O.（注30）, S. 75 ff., 173 ff. そのうち、ルートヴィヒ五世に捧げられた Agatharchia の史料編纂として Ebenda, S. 229-249. ヴィムプフェリングについては、他に、Joseph Knepper, Jakob

Wimpfeling (1450-1528). Sein Leben und und seine Werke, (Erläuterungen und Ergänzungen zu Janssens Geschichte des deutschen Volkes, Bd. 3, H. 2-4), Freiburg 1902; Paul ADAM, L'humanisme a Sélestat. L'ecole, les humanistes, la bibliotheque, Sélestat 1962, S. 37-50; Dieter MERTENS, Jakob Wimpfeling (1450-1528). Pädagogischer Humanismus, in: P. G. SCHMIDT (Hg.), a. a. O.（注25）, S. 35-57; Markus MÜLLER, Fürstenspiegel und Bischofsspiegel: der Beitrag Jakob Wimpfelings, in: Sven LEMBKE und DERS. (Hg.), Humanisten am Oberrhein. Neue Gelehrte im Dienst alter Herren, (Schriften zur süddeutschen Landeskunde, 37), Leinfelden－Echterdingen 2004, S. 9-147 も参照。

（35）Stefan RHEIN, Johannes Reuchlin (1455-1522). Ein deutscher >>uomo universale<<, in: P. G. SCHMIDT (Hg.), a. a. O.（注25）, S. 59-75, S. 66. ロイヒリンについては他に、Manfred KREBS (Hg.), Johannes Reuchlin 1455-1522. Festgabe seiner Vaterstadt Pforzheim zur 500. Wiederkehr seines Geburtstages, Pforzheim 1955; Markus Rafael ACKERMANN, Der Jurist Johannes Reuchlin (1455-1522), (Schriften zur Rechtsgeschichte, H. 77), Berlin 1999.

（36）ルートヴィヒ・フォン・アストの人文主義への関心については、Frank E. BARON, a. a. O.（注25）, S. 12 ff. ハイデルベルク大学で教会法の博士学位を取得し、後にシュパイアー司教となったラムングと人文主義の関係については、Maximilian BUCHNER, Die Stellung des kurpfälzischen Kanzlers und Speierer Bischofs Mathias Ramung (†1478) zum geistigen Leben seiner Zeit, in: Neue Heidelberger Jahrbücher 16 (1910), S. 81-94, S. 88 ff. を参照。また、DERS., Ein Jugendgedicht Jakob Wimpfelings auf Bischof Mathias Ramung von Speier. Beitrag zur Geschichte des Humanismus in Heidelberg, in: ZGO 61 (1907), S. 478-485 も参照。

（37）マティアス・フォン・ケムナートの歴史叙述とその機能に関しては、Birgit STUDT, Fürstenhof und Geschichte. Legitimation durch Überlieferung, (Norm und Struktur, Bd. 2), Köln u. a. 1992. また、DIES., Überlieferung und Interesse. Späte Handschriften der Chronik des Matthias von Kemnat und die Geschichtsforschung der Neuzeit, in: Kurt ANDERMANN (Hg.), Historiographie am Oberrhein im späten Mittelalter und in der frühen Neuzeit, (Oberrheinische Studien, Bd. 7), Sigmaringen 1988, S. 275-308 も参照。宮廷およびその周辺で成立した歴史叙述一般に関しては、DIES, Hofgeschichtsschreibung, in: W. PARAVICINI (Hg.), Hof und Schrift（注27）, S. 373-390.

（38）B. STUDT, Fürstenhof（注37）, S. 372-421. マティアス・フォン・ケムナートの年代記のテクストは、Konrad HOFMANN (Hg.),

Matthias von Kemnat, Chronik Friedrichs I., in: Quellen zur Geschichte Friedrichs I des Siegreichen Kurfürsten von der Pfalz, Bd. 1, S. 1-141, Bd. 2, S. 304-315, (Quellen und Erörterungen zur bayerischen und deutschen Geschichte, Bd. 2, 3), München 1862-63 (ND Aalen 1969).

（39）プファルツ宮廷における音楽活動については、Gerhard Pietzsch, Quellen und Forschungen zur Geschichte der Musik am kurpfälzischen Hof zu Heidelberg bis 1622, (Akademie der Wissenschaft und der Literatur, Abhandlungen der geistes- und sozialwissenschaftlichen Klasse, Jg. 1963, Nr. 6), Heidelberg 1963, S. 583-763. 特にループレヒト一世以降の宮中伯の教養および音楽とのかかわりについては、Ebenda, S. 618 ff.

（40）この結婚式については、Maximilian Buchner, Die Amberger Hochzeit (1474). Ein Beitrag zur politischen und kulturellen Geschichte des ausgehenden Mittelalters, in: ZGO 64 (1910), S. 584-604, 65 (1911), S. 95-127. なお、この結婚の前に、フィリップとブルゴーニュ公シャルルの娘マリアとの婚姻が企てられていたことは、フリードリヒ一世のもとでプファルツが帝国政治のみならず、ヨーロッパ政治上の主要アクターの一角を占めていたことを示している。M. Buchner, ZGO 64, S. 590 ff.

（41）この宮廷条令については、Ellen Widder, Der Amberger Hof 1474. Entstehung und Funktion der ältesten kurpfälzischen Hofordnung, in: Dies. u. a., (Hg.), Manipulus florum. Aus Mittelalter, Landesgeschichte, Literatur und Historiographie. Festschrift für Peter Johanek zum 60. Geburtstag, Münster u. a. 2000, S. 271-305. 条令の史料刊本は、Ebenda, S. 296-305. 中世後期・近世ドイツの宮廷条令については、論文集 Holger Kruse und Werner Paravicini (Hg.), Höfe und Hofordnungen 1200-1600, (Residenzenforschung, Bd. 10), Sigmaringen 1999 の他、Ellen Widder, Hofordnungen, in: W. Paravicini (Hg.), Hof und Schrift（注27）, S. 391-407（S. 396-405 に、やはり一四七四年の宮廷条令のエディションがある）; Dietmar Willoweit, Hofordnungen als Zeugnisse des Rechtsdenkens, in: Reinhardt Butz u. a. (Hg.), Hof und Theorie. Annäherungen an ein historisches Phänomen, (Norm und Struktur. Studien zum sozialen Wandel in Mittelalter und früher Neuzeit, Bd. 22), Köln u. a. 2004, S. 165-178. 多くの領邦において、他の分野の立法と同様、宮廷条令立法の盛期は一六世紀であった。Ebenda, S. 165 ff. 個別領邦の宮廷条令については、例えば、Klaus Flink (Bearb.), Die klevischen Hofordnungen, (Rechtsgeschichtliche Schriften, Bd. 9), Köln u. a. 1997.

（42）ハイデルベルク大学については、M. Schaab, Geschichte（注22）, S. 120 ff., 186 f.; Gerhard Ritter, Die Heidelberger

Universität. Ein Stück deutscher Geschichte, Bd. 1: Das Mittelalter (1386-1508), Heidelberg 1936; Hermann Weisert, Die Verfassung der Universität Heidelberg. Überblick 1386-1952, (Abhandlungen der Heidelberger Akademie der Wissenschaften, Philosophisch－historische Klasse, Jg. 1974, 2. Abhandlung), Heidelberg 1974; Eike Wolgast, Die kurpfälzische Universität 1386-1803, in: Wilhelm Doerr (Hg.), Semper apertus. Sechshundert Jahre Ruprecht－Karls－Universität Heidelberg 1386-1986, Bd. 1: Mittelalter und frühe Neuzeit 1386-1803, Berlin u. a. 1985, S. 1-70; E. Wolgast, Die Universität Heidelberg 1386-1986, Berlin u. a. 1986; Peter Moraw, Heidelberg. Universität, Hof und Stadt im ausgehenden Mittelalter, in: Bernd Möller u. a. (Hg.), Studien zum städtischen Bildungswesen des späten Mittelalters und der frühen Neuzeit, (Abhandlungen der Akademie der Wissenschaften in Göttingen. Philologisch-historische Klasse. 3. Folge, 137), Göttingen 1983, S. 524-552, (Ders., Gesammelte Beiträge zur deutschen und europäischen Universitätsgeschichte. Strukturen－Personen－Entwicklungen, (Education and Society in the Middle Ages and Renaissance, 31), Leiden u. a. 2008, S. 295-329 にも収録されている); Dietmar Willoweit, Das juristische Studium in Heidelberg und die Lizentiaten der Juristenfakultät von 1386 bis 1436, in: W. Doerr, a. a. O., S. 85-135; Enno Bünz, Die Universität zwischen Residenzstadt und Hof im späten Mittelalter. Wechselwirkung und Distanz, Integration und Konkurrenz, in: J. Hirschbiegel u. a. (Hg.), Städtisches Bürgertum（注1）, S. 229-253, S. 249 ff. 中世後期の神聖ローマ帝国における大学に関する日本の研究として、島田雄次郎『ヨーロッパ大学史研究』（一九六七年　未来社）七－九四頁、別府昭郎『ドイツにおける大学教授の誕生』（一九九八年　創文社）二三－八二頁、浅野啓子「中世後期ボヘミアの教会改革運動とプラハ大学」浅野啓子・佐久間弘展編著『教育の社会史　ヨーロッパ中・近世』（二〇〇六年　知泉書館）三一－六一頁、浅野啓子「一四－一五世紀チェコにおけるフス派大学教師と王権」森原隆編『ヨーロッパ・エリート支配と政治文化』（二〇一〇年　成文堂）二六〇－二七九頁。

(43) 設立に至る状況と経過について、H. Weisert, a. a. O.（注42）, S. 19 f.; E. Wolgast, Die kurpfälzische Universität（注42）, S. 1 ff.

(44) Eduard Winkelmann (Hg.), Urkundenbuch der Universität Heidelberg, Bd. 1: Urkunden, Heidelberg 1886, Nr. 2; M. Schaab－R. Lenz, a. a. O.（注3）, Nr. 79.

（45）一三八六年一〇月に、宮中伯ループレヒト一世は、大学の組織、教師と学生に与えられる保護と安全通行権、市内の家賃、流通税の免除、教師と学生に対する裁判手続などに関して、特権状を発行した。E. Winkelmann, a. a. O.（注44）, Nr. 4-9.

（46）D. Willoweit, Studium（注42）, S. 120 f.; P. Moraw, Heidelberg（注42）, S. 525.

（47）E. Winkelmann, a. a. O.（注44）, Nr. 1, 3.

（48）既に教皇の設立特権状がパリと同様の教育活動および特権を保証していた。E. Winkelmann, a. a. O.（注44）, Nr. 2, ... ut in dicta villa decetero sit studium generale ad instar Parisiensis illudque perpetuis temporibus inibi vigeat tam in theologia et iuris canonici quam alia qualibet licita facultate, quodque legentes et studentes ibidem omnibus privilegiis libertatibus et immunitatibus, concessis magistris in theologia ac doctoribus legentibus et studentibus commorantibus in studio generali Parisiensi, gaudeant et utantur ...“ また一三八六年一〇月の宮中伯ループレヒト一世の特権状もパリ大学がフランス王から享受しているのと同様の特権を認めた。Ebenda, Nr. 5, “Insuper omnes et singulos dictos magistros et scolares presentes advenientes et recedentes in omnibus districtibus nobis subiectis omnibus et singulis privilegiis et franchisiis, libertatibus et immunitatibus volumus gaudere, quantum consuetudo patrie hoc tollerare potest, quibus magistri et scolares in universitate Parisiensi studentes per illustrissimos Francorum reges hactenus in regno Francie privilegiati exstiterunt.”

（49）設立時の組織構想とその後の変化については、H. Weisert, a. a. O.（注42）, S. 20 ff.; E. Wolgast, Die kurpfälzische Universität（注42）, S. 3-5.

（50）E. Winkelmann, a. a. O.（注44）, Nr. 46.

（51）Eduard Winkelmann (Hg.), Urkundenbuch der Universität Heidelberg, Bd. 2: Regesten, Heidelberg 1886, Nr. 182, 183.

（52）H. Weisert, a. a. O.（注42）, S. 40 ff.; E. Wolgast, Die kurpfälzische Universität（注42）, S. 5-7.

（53）P. Moraw, Heidelberg（注42）, S. 529.

（54）E. Wolgast, Die kurpfälzische Universität（注42）, S. 16. もっとも、それ以前から、ヨブ・フェーナー Job Vener などイタリアでローマ法を学んだ学識法曹が、プファルツ宮廷に仕えたことについて、P. Moraw, Heidelberg（注42）, S. 531 ff.

（55）E. Wolgast, Die kurpfälzische Universität（注42）, S. 9f., 19.

（56）E. Wolgast, Die kurpfälzische Universität（注42）, S. 12 f.; P. Moraw, Heidelberg（注42）, S. 543.

（57）ハイデルベルク市民の中からも，中・上層階層出身者を中心に，多くの学生がハイデルベルク大学で学んだことについては，P. Moraw, Heidelberg（注42）, S. 541 ff. を参照。

（58）ハイデルベルク大学では，創設時のマルシリウス・フォン・インゲン以来まず名目論（いわゆるvia moderna）が教えられていたが，その後一四四〇年代から実在論（いわゆるvia antiqua）を奉じる教師が登場し，両派の間で激しい対立が起きていた。この対立と一四五二年のフリードリヒ一世の大学改革について，H. Weisert, a. a. O.（注42）, S. 46 ff.; E. Wolgast, Die kurpfälzische Universität（注42）, S. 13 ff.; E. Winkelmann, a. a. O.（注44）, Nr. 109. その後の宮中伯たちによる大学への介入について，H. Weisert, a. a. O.（注42）, S. 48 ff.

（59）P. Moraw, Heidelberg（注42）, S. 530f.; D. Willoweit, Studium（注42）, S. 124.

（60）ハイデルベルク大学と人文主義との関係について，E. Wolgast, Die kurpfälzische Universität（注42）, S. 17. ペーター・ルーダーと大学との関係について，R. Kettemann, a. a. O.（注25）, S. 25 ff.

（61）中世後期ドイツの諸領邦におけるアムト制と地方行財政の発達について，一般的には，Dietmar Willoweit, Die Entwicklung und Verwaltung der spätmittelalterlichen Landesherrschaft, in: Kurt G. A. Jeserich u. a. (Hg.), Deutsche Verwaltungsgeschichte, Bd.1: Vom Spätmittelalter bis zum Ende der Reiches, Stuttgart 1983, S. 66-143, とりわけS. 92-104; E. Schubert, a. a. O.（注1）, S. 14 ff. 領邦間の比較プロソポグラフィー研究として重要なのが，Christian Hesse, Amtsträger der Fürsten im spätmittelalterlichen Reich. Die Funktionseliten der lokalen Verwaltung in Bayern－Landshut, Hessen, Sachsen und Württemberg 1350-1515, (Schriftenreihe der Historischen Kommission bei der Bayerischen Akademie der Wissenschaften, Bd. 70), Göttingen 2003. 近世への展開については，Wilhelm Janssen, Neue Wege und Formen territorialer Verwaltung am Niederrhein im Übergang zur frühen Neuzeit, in: Rhvjbll 58 (1994), S. 133-148. 西南ドイツを対象とした，地方末端における支配関係と近世的支配の形成を扱ったモノグラフとして，Thomas Simon, Grundherrschaft und Vogtei. Eine Strukturanalyse spätmittelalterlicher und frühneuzeitlicher Herrschaftsbildung, (Ius Commune, Sonderhefte 77), Frankfurt a. M. 1995.

（62）一四世紀末までのプファルツ支配の拡大については，Meinrad Schaab, Die Festigung der pfälzischen Territorialmacht

im 14. Jahrhundert, in: Hans Patze (Hg.), Der deutsche Territorialstaat im 14. Jahrhundert, Bd. 2, (Vorträge und Forschungen, Bd. 14), Sigmaringen 1971, S. 171-197, S. 177 ff.; Ders., Geschichte（注22）, S. 80 ff., 104 ff.; Ders., Kurpfalz, in: Ders und Hansmartin Schwarzmaier (Hg.), Handbuch der Baden-Württembergischen Geschichte, Bd. 2: Die Territorien im alten Reich, Stuttgart 1995, S. 247-333, S. 256 ff. を参照。

（63）A. Schäfer, Bretten（注102）, S. 84.

（64）RPR, 1, Nr. 3070, 3098, 3175; M. Schaab, Festigung（注62）, S. 177, 185.

（65）RPR, 1, Nr. 3916, 3928. Ladenburg に対しては、ライン宮中伯とヴォルムス司教が半分ずつ支配権を持つこととなった。RPR, 1, Nr. 4620.

（66）M. Schaab, Festigung（注62）, S. 177.

（67）この分野に関して、中世後期ドイツの領邦一般については、E. Schubert, a. a. O.（注1）, S. 61 ff.

（68）宮中伯の地方行財政の発展については、Henry J. Cohn, The Government of the Rhine Palatinate in the Fifteenth Century, Oxford 1965, S. 235 ff.; M. Schaab, Festigung（注62）, S. 191 ff.; Ders., Geschichte（注22）, S. 118 f., 189 ff., 207. 個別のオーバーアムト Oberamt については、Daniel Häberle, Das Reichsland bei Kaiserslautern, Kaiserslautern 1907; Wilhelm Fabricius, Das Pfälzische Oberamt Simmern, in: Westdeutsche Zeitschrift für Geschichte und Kunst 28 (1909), S. 70-131; Eugen Schmidtborn, Zur Geschichte des kurpfälzischen Oberamts Bacharach, (Diss. phil. Marburg), Marburg 1913; Theodor Karst, Neustadt als linksrheinisches Zentrum pfalzgräflich-kurpfälzischer Herrschaft und Verwaltung, in: K.－P. Westrich, Neustadt（注102）, S. 139-170; A. Schäfer, Bretten（注102）, S. 135 ff.; Sigrid Schmitt, Territorialstaat und Gemeinde im kurpfälzischen Oberamt Alzey, Vom 14. bis zum Anfang des 17. Jahrhunderts, (Geschichtliche Landeskunde, Bd. 38), Stuttgart 1992（一六世紀を中心にしたモノグラフ）；オーバーアムト・ゲルマースハイム Oberamt Germersheim については、Joseph Probst, Geschichte der Stadt und Festung Germersheim, Speyer 1898, S. 265 ff. 更に下のレベルの地方行財政についての個別研究として、Rüdiger Lenz, Kellerei und Unteramt Dilsberg. Entwicklung einer regionalen Verwaltungsinstanz im Rahmen der kurpfälzischen Territorialpolitik am unteren Neckar, (Veröffentlichungen der Kommission für geschichtliche Landeskunde in Baden－Württemberg, Reihe B: Forschungen, Bd. 115), Stuttgart 1989

が，やはり主に近世の状態を中心に検討している。

(69) M. Schaab, Entstehung (注2), S. 255, 263 f.; Siegfried Hofmann, Urkundenwesen, Kanzlei und Regierungssystem der Herzöge von Bayern und Pfalzgrafen bei Rhein von 1180 bzw. 1214 bis 1255 bzw. 1294, (Münchener Historische Studien, Abteilung Geschichtliche Hilfswissenschaften, Bd. 3), Kallmünz 1967, S. 32 f.

(70) S. Hofmann, a. a. O. (注69), S. 31.

(71) S. Hofmann, a. a. O. (注69), S. 31 f.

(72) S. Hofmann, a. a. O. (注69), S. 103 f.

(73) Alfons Sprinkart, Kanzlei, Rat und Urkundenwesen der Pfalzgrafen bei Rhein und Herzöge von Bayern 1294 bis 1314 (1317). Forschungen zum Regierungssystem Rudolfs I. und Ludwigs Ⅳ., (Forschungen zur Kaiser-und Papstgeschichte des Mittelalters. Beiheft zu J. F. Böhmer, Regesta Imperii, Bd. 4), Köln/Wien 1986, S. 222 ff.

(74) A. Sprinkart, a. a. O. (注73), S. 235 ff.

(75) A. Sprinkart, a. a. O. (注73), S. 243 ff.

(76) Joachim Spiegel, Urkundenwesen, Kanzlei, Rat und Regierungssystem des Pfalzgrafen bei Rhein und Herzogs von Bayern Ruprecht I. (1309-1390), 2 Teile, Neustadt an der Weinstraße 1996., T. 1, S. 350 ff.

(77) J. Spiegel, a. a. O. (注76), T. 1, S. 353 ff.

(78) J. Spiegel, a. a. O. (注76), T. 1, S. 367 ff.

(79) J. Spiegel, a. a. O. (注76), T. 1, S. 366 f.

(80) J. Spiegel, a. a. O. (注76), T. 1, S. 389 ff.

(81) J. Spiegel, a. a. O. (注76), T. 1, S. 474 ff. ゲルマースハイムのフォークトについては，J. Probst, Germersheim (注68), S. 302 f. ジッキンゲン Sickingen，ヒルシュホルン Hirschhorn，リンデンフェルス Lindenfels，ナイペルグ Neipergg，ゲミンゲン Gemmingen などの下級貴族家門出身者がフォークトになっている。

(82) J. Spiegel, a. a. O. (注76), T. 1, S. 393 ff.; M. Schaab, Festigung (注62), S. 192. 一五世紀中葉以降，ゲルマースハイムでも地方書記 Landschreiber が史料に現れる。J. Probst, Germersheim (注68), S. 308.

（83）J. Kolb, a. a. O.（注2）, S. 187 f.; M. Schaab, Festigung, S. 192.
（84）J. Kolb, a. a. O.（注2）, S. 136 ff. ただし、残っている史料は上プファルツ関係のものが比較的多い。
（85）J. Kolb, a. a. O.（注2）, S. 142 f., 147. ヴィッツトゥーム、フォークトなどと税関書記 Zollschreiber らとのこのような違いは、前者が現地で多くの出費を自らなす必要があったのに対して、後者にはその必要性が小さかったことによるのであろう。
（86）ライン宮中伯の城塞政策の概観として、M. Schaab, Geschichte（注22）, S. 109 f.
（87）J. Spiegel, a. a. O.（注76）, T. 1, S. 413 ff.
（88）M. Schaab, Geschichte（注22）, S. 114.
（89）J. Spiegel, a. a. O.（注76）, T. 1, S. 436 ff.
（90）M. Schaab, Geschichte（注22）, S. 187 ff.; Ders., Kurpfalz（注62）, S. 276 ff.
（91）以下、M. Schaab, Geschichte（注22）, S. 192, 207; H. J. Cohn, a. a. O.（注68）, S. 235 ff.; S. Schmitt, Territorialstaat（注68）, S. 9.
（92）具体的に例えば、オーバーアムト・アルツァイにおける地方書記職の発展について、S. Schmitt, Territorialstaat（注68）, S. 13. なお、そこで農民に課されたさまざまな負担については、Ebenda, S. 139 ff.
（93）このような政策の結果成立した村落裁判所の一六世紀における状態については、S. Schmitt, Territorialstaat（注68）, S. 117 ff.
（94）例えば、アルツァイ近くのオストホーフェン Osthofen において、プファルツが体僕支配 Leibherrschaft を手掛かりに、裁判支配の半分を有したマインツ大司教の影響力を空洞化していったことについて、S. Schmitt, Territorialstaat（注68）, S. 94 ff.
（95）S. Schmitt, Territorialstaat（注68）, S. 114.
（96）オーバーアムト・アルツァイにおける領邦支配下の土地領主支配について、S. Schmitt, Territorialstaat（注68）, S. 161 ff.
（97）やはりオーバーアムト・アルツァイにおける具体例（農村ゲマインデの組織、経済活動、社会構造）として、S. Schmitt, Territorialstaat（注68）, S. 228 ff.

（98）ツェント裁判所およびその基礎となったツェントについては，さしあたり，Gerhard Theuerkauf, Art. Zent, in: HRG, 1. Aufl., Berlin 1998, Sp. 1663 f.; Ders., Art. Zentgericht, in: HRG, 1. Aufl., Berlin 1998, Sp. 1664 f. を参照。

（99）Fritz Zimmermann, Die Weistümer und der Ausbau der Landeshoheit in der Kurpfalz, (Historische Studien, H. 311), Berlin 1937, S. 23 ff. Odenwald の Affolterbach, Waldmichelbach，Bergstraße の Landberg, Sachsenheim，Neckar 流域の Reichartshausen, Neckargmünd の各 Zent において法判告がなされ，公証人によって記録された。Carl Brinkmann (Bearb.), Reichartshauser und Meckesheimer Zent, (Badische Weistümer und Dorfordnungen, 1. Abt. Pfälzische Weistümer und Dorfordnungen, H. 1), Heidelberg 1917, Nr. 3 (Reichartshausen); Karl Kollnig (Bearb.), Die Weistümer der Zent Schriesheim, (Badische Weistümer und Dorfordnungen, Bd. 2), (Veröffentlichungen der Kommission für Geschichtliche Landeskunde in Baden－Württemberg, Reihe A: Quellen, Bd. 16), Stuttgart 1968, S. 10 ff., Art. 1, „Wir bekennen, sprechen und wysen hutzutage ja unserm gnedigen hern, herzog Ludwigen, obersten vogt und hern des landgerichtes, und das er uff und in derselben zent zu gebieten und zu verbieten und auch buß, hoe und nider, zu machen hat.“ (Sachsenheim), S. 293 (Neckargmünd).

（100）F. Zimmermann, a. a. O.（注99）, S. 41 ff., 65 ff., 70 ff., 77 ff. 例えば，プファルツとマインツの間で争われていた Schriesheim の Zentallmend の支配権は，一四四九年の法判告でプファルツ側にあることが宣言された。K. Kollnig, a. a. O.（注99）, S. 36 ff., Art. 2, „Da wysen wir, das unser genediger herr, der pfalzgrave, oberster faut und herr sy, die alman zu beschirmen und schuern dem land und armen lutten, die recht darin han.“ なお，ライン宮中伯の支配下に入ったライン右岸の Zent およびその管轄区域における法判告の史料刊本として，上記の他に，Karl Kollnig (Bearb.), Die Weistümer der Zent Kirchheim, (Badische ..., Bd. 3), (Veröffentlichungen ... Bd. 29), Stuttgart 1979; Ders., (Bearb.), Die Weistümer der Zenten Eberbach und Mosbach, (Badische ..., Bd. 4), (Veröffentlichungen ..., Bd. 38), Stuttgart 1985. 法判告 Weistümer の研究史および概念規定については，さしあたり，S. Schmitt, Territorialstaat（注68）, S. 26 ff.; Werner Rösener, Einführung in die Agrargeschichte, Darmstadt 1997, S. 48 -55 およびそこに挙げられた文献を参照。

（101）中世後期ドイツ領邦における都市の意義について，一般的には，E. Schubert, a. a. O.（注1）, S. 73 ff. 日本語文献として，千葉徳夫「中世後期」（注1）。

(102) 宮中伯の都市統治については、M. Schaab, Geschichte (注22)„ S. 110 ff.; Sigrid Schmitt, Landesherr, Stadt und Bürgertum in der Kurpfalz des späten Mittelalters und der frühen Neuzeit, in: Jürgen Treffeisen und Kurt Andermann (Hg.), Landesherrliche Städte in Südwestdeutschland, (Oberrheinische Studien, Bd. 12), Sigmaringen 1994, S. 45-66. 以下の都市政策について、Ebenda, S. 47 ff. また最近のモノグラフとして、Christian Reinhardt, Fürstliche Autorität versus städtische Autonomie. Die Pfalzgrafen bei Rhein und ihre Städte 1449 bis 1618: Amberg, Mosbach, Nabburg und Neustadt an der Haardt, (Veröffentlichungen der Kommission für geschichtliche Landeskunde in Baden－Württemberg, Reihe B: Forschungen, Bd. 186), Stuttgart 2012. 宮中伯支配下の個々の都市に関しては、アルツァイについて、Ludwig Petry, Alzey in der wittelsbachischen Politik, in: Friedrich Karl Becker (Hg.), 1750 Jahre Alzey. Festschrift, Alzey 1973, S. 127-140; Klaus－Peter Schröder, Alzey. Verfassungsgeschichtliche Entwicklung einer kurpfälzischen Stadt, in: Friedrich Karl Becker (Hg.), 700 Jahre Stadt Alzey. Festschrift, Alzey 1977, S. 58-100. ノイシュタットについて、Pirmin Spiess, Verfassungsentwicklung der Stadt Neustadt an der Weinstraße von den Anfängen bis zur französischen Revolution, (Veröffentlichungen zur Geschichte von Stadt und Kreis Neustadt an der Weinstraße, Schriftenreihe der Bezirksgruppe Neustadt im Historischen Verein der Pfalz 6), Speyer 1970; Klaus－Peter Westrich (Bearb.), Neustadt an der Weinstraße. Beiträge zur Geschichte einer pfälzischen Stadt, Neustadt an der Weinstraße 1975; Adalbert Erler (Hg.), Der Oberhof zu Neustadt an der Weinstraße, (Frankfurter wissenschaftliche Beiträge, Rechts- und wirtschaftswissenschaftliche Reihe, Bd. 23, 24), 2 Bde., Frankfurt a. M. 1968, 1971; Ch. Reinhardt, a. a. O., S. 42-68. カイザースラウテルンについて、Karl Niederhöfer, Die Stadtordnung für Kaiserslautern zu Beginn des 15. Jahrhunderts. Ein Beitrag zum Recht der kurpfälzischen Territorialstädte, in: MHVP 74 (1976), S. 29-38. ゲルマースハイムについて、J. Probst, Germersheim, (注68). モスバッハについて、Ch. Reinhardt, a. a. O., S. 68-91. ヴァインハイムについて、John Gustav Weiss, Geschichte der Stadt Weinheim an der Bergstraße, Weinheim 1911; Fritz Trautz, Die mittlere Stadt der deutschen Geschichte unter besonderer Berücksichtigung von Weinheim, in: Weinheimer Geschichtsblatt 23 (1955), S. 3-18. エーバーバッハについて、Hans Martin Schwarzmeier, Geschichte der Stadt Eberbach am Neckar bis zur Einführung der Reformation 1556, (Geschichte der Stadt Eberbach am Neckar, Bd. 1), Sigmaringen 1986, S. 79-180. ドムシュタットについて、Alfons Schäfer,

Geschichte der Stadt Bretten von den Anfängen bis zur Zerstörung im Jahre 1689, (Oberrheinische Studien, Bd. 4), Karlsruhe 1978 とりわけ S. 95-195; Ders., (Bearb.), Urkunden, Rechtsquellen und Chroniken zur Geschichte der Stadt Bretten, Bretten 1967.

(103) RPR, 1, Nr. 943; Pirmin Spiess, Das Privileg König Rudolfs von Habsburg vom 6. April 1275, in: Klaus－Peter Westrich, Neustadt（注102）, S. 91-106. 都市ノイシュタットの起源と初期史については、また、Hermann Schreibmüller, Die ältesten Besitzer und der Name der Stadt Neustadt an der Haardt, in: Ebenda, S. 63-71; Karl Richard Weintz, Zur Entstehung von Neustadt an der Weinstraße, in: Ebenda, S. 73-76; Klaus－Peter Schröder, Überlegungen zur Gründung von Neustadt an der Weinstraße, in: Ebenda, S. 77-89 も参照。

(104) RPR, 1, Nr. 1011; Ludwig Baur (Hg.), Hessische Urkunden, Bd. 2, ND Aalen 1979, Nr. 307; M. Schaab－R. Lenz, a. a. O.（注3）, Nr. 31; Georg Friedrich Böhn, Die Alzeyer Stadtrechtsverleihung von 1277 in territorialgeschichtlicher Sicht, in: Friedrich Karl Becker (Hg.), 1750 Jahre Alzey（注102）, S. 141-151; Albrecht Eckhardt, König Rudolfs Stadtrechtsverleihung für Alzey vom 24. Oktober 1277. Mit einer vergleichenden Untersuchung der Freiungsprivilegien für Zwingenberg, Landau, Neustadt a. d. W., Braubach, Dieburg und Camberg (1274-1281) sowie andere Orte des mittelrheinischen Raumes, in: Friedrich Karl Becker (Hg.), 700 Jahre Stadt Alzey（注102）, S. 32-57.

(105) RPR, 1, Nr. 2952; その意義について、M. Schaab, Festigung（注62）, S. 179.

(106) アルツァイの城とブルクマンについては、Karl－Heinz Spiess, Burg, Burggraf und Burgmannschaft im spätmittelalterlichen Alzey, in: F. K. Becker (Hg.), 700 Jahre Stadt Alzey（注102）, S. 106-115. アルツァイでは城の意義をも反映して、一四世紀の六〇年代以降、オーバーアムトの責任者のタイトルとして、ヴィッツトゥームに代わってブルクグラーフが用いられた。Ebenda, S. 109 f. また S. Schmitt, Territorialstaat（注68）, S. 11も参照。

(107) S. Schmitt, Landesherr（注102）, S.56 ff. ノイシュタットにおける宮中伯の支配権について、P. Spiess, Verfassungsentwicklung（注102）, S. 34 ff. アムトの統括者たるフォークトおよび都市支配にあたるシュルトハイスの権限について、Ebenda, S. 53 ff. 市民団体について、Ebenda, S. 70 ff. また、Ders., Neustadter Ratsherren, Stadtschreiber und Schultheissen bis zum Ausgang des 18. Jahrhunderts, in: K.－P. Westrich, a. a. O.（注102）, S. 107-138; アルツァイのシュル

トハイスとその裁判所については、K－P. Schröder, a. a. O.（注102）, S. 87 ff. また、アルツァイにおける市民自治に対する宮中伯支配の優位について、Ebenda, S. 83 f. ゲルマースハイムにおけるフォークトとシュルトハイスについては、J. Probst, a. a. O.（注68）, S. 302 ff., 354 f. なお、ゲルマースハイムにも城塞とそのブルクマン団体が存在した。J. Probst, a. a. O.（注68）, S. 23 ff.

（108）宮中伯フィリップが一四九二年にブレッテンに与えた年市特権については、A. Schäfer, Bretten（注102）, S. 129 ff.

（109）S. Schmitt, Landesherr（注102）, S. 52 ff.; Ch. Reinhardt, a. a. O.（注102）, S. 413 ff.; K－P. Schröder, a. a. O.（注102）, S. 73. なお、一四八九年には、宮中伯フィリップによって、ヴァインハイムにも同様の特権状が与えられた。

（110）S. Schmitt, Landesherr（注102）, S. 61 f.; Ch. Reinhardt, a. a. O.（注102）, S. 417 f.; Pirmin Spiess, Die Stadtordnung Philipps des Aufrichtigen für Neustadt aus dem Jahre 1493, in: MHVP 66 (1968), S. 197-305, S. 205 ff. この騒擾の後に宮中伯フィリップが定めた都市条令のテクストは、Ebenda, S. 215-284. この条令では、シュルトハイスや都市参事会でなく、アムトマンに多くの権限が与えられ、その意味で都市のアムト体制への組み込みが進展した。S. Schmitt, Landesherr（注102）, S.64 f.

（111）S. Schmitt, Landesherr（注102）, S. 63 f. 同じように、もともと国王都市で、質入れ等を経てプファルツ支配下に入ったモスバッハとカイザースラウテルンを、宮中伯がいかにして統合していったかについては、Christian Reinhardt, Die Integration der verpfändeten Reichsstädte Mosbach und Kaiserslautern in die Pfalzgrafschaft bei Rhein im 14. und 15. Jahrhundert, in: Kaiserslauterer Jahrbuch für pfälzische Geschichte und Volkskunde 5 (2005), S. 11-84. モスバッハが比較的すみやかに宮中伯のコントロール下に置かれたのに対して、カイザースラウテルンではプファルツ支配の強化に対する抵抗がしばしば見られ、宮中伯の方も慎重に行動していた。しかしカイザースラウテルンも含めて、一五世紀後半には、宮中伯と個々の都市との関係の統一化がすすめられ、ランズフート継承戦争では両都市とも本来のプファルツ領邦都市と同様に戦備を負担することとなった。

（112）中世後期ドイツの領邦における、教会統治と教会政策について一般的には、E. Schubert, a. a. O.（注1）, S. 38 ff.; D. Willoweit, Entwicklung（注61）, S. 123, 129 f. プファルツに関しては、Richard Lossen, Staat und Kirche in der Pfalz im Ausgang des Mittelalters. (Vorreformationsgeschichtliche Forschungen 3), Münster 1907. または、M. Schaab, Geschichte（注22）, S. 112 ff., 185 f. その他の領邦については、例えば、Dieter Stievermann, Landesherrschaft und Klosterwesen im

spätmittelalterlichen Württemberg, Sigmaringen 1989; Bernhard Neidiger, Das Dominikanerkloster Stuttgart, die Kanoniker vom gemeinsamen Leben in Urach und die Gründung der Universität Tübingen. Konkurrierende Reformansätze in der württembergischen Kirchenpolitik am Ausgang des Mittelalters, (Veröffentlichungen des Archivs der Stadt Stuttgart, Bd. 58), Stuttgart 1993; Manfred Schulze, Fürsten und Reformation. Geistliche Reformpolitik weltlicher Fürsten vor der Reformation, (Spätmittelalter und Reformation, Neue Reihe 2), Tübingen 1991.（一五世紀後半以降のヴェッティーン家 Wettiner の教会統治と教会政策。また、Ebenda, S. 13-45 におけるドイツ諸領邦の概観も参照。）

(113) 一三世紀末までについては、Gerhard Schwertl, Die Beziehungen der Herzöge von Bayern und Pfalzgrafen bei Rhein zur Kirche (1180-1294), (Miscellanea Bavarica Monacensia, H. 9), München 1968, S. 216 ff., 425 ff.

(114) G. Schwertl, a. a. O.（注113）, S. 425 ff.

(115) R. Lossen, a. a. O.（注112）S. 138 ff. 中世後期の宮中伯の教会統治については、また、ロッセンの研究にもとづく M. Schulze, a. a. O.（注112）, S. 20 ff. の記述も参照。

(116) RPR, 1, Nr. 3997 (1372. 6. 1); Vgl. RPR, 1, Nr. 4546 (1384. 7. 24); M. Schaab, Geschichte（注22）, S. 113. なお、マウルブロン修道院については、さしあたり、Landesdenkmalamt Baden-Württemberg (Hg.), Maulbronn. Zur 850jährigen Geschichte des Zisterzienserklosters, (Forschungen und Berichte der Bau- und Kunstdenkmalpflege in Baden-Württemberg, Bd. 7), Stuttgart 1997 とりわけそこに収録された Peter Rückert, Die Bedeutung Maulbronns für die Siedlungsgenese zwischen Stromberg und Schwarzwald im Mittelalter, in: Ebenda, S. 15-29 および Kurt Andermann, Zur Besitz- und Wirtschaftsgeschichte des Klosters Maulbronn, in: Ebenda, S. 31-42 を参照。

(117) また、R. Lossen, a. a. O.（注112）, S. 135 ff. 宮中伯による Kollegiatsstift や修道院の創建はそれほど多いわけではない。

(118) R. Lossen, a. a. O.（注112）, S. 99 f.

(119) R. Lossen, a. a. O.（注112）, S. 101 ff.

(120) 中世後期の修道院改革については、Kaspar Elm (Hg.), Reformbemühungen und Observanzbestrebungen im spätmittelalterlichen Ordenswesen, (Berliner Historische Studien, Bd. 14, Ordensstudien 6), Berlin 1989 が重要な論文集である。その後の研究も合めて、さしあたり、Kaspar Elm, Monastische Reformen zwischen Humanismus und Reformation,

in: Lothar Perlitt (Hg.), 900 Jahre Kloster Bursfelde. Reden und Vorträge zum Jubiläum 1993, Göttingen 1994, S. 59-111; Dieter Mertens, Monastische Reformbewegungen des 15. Jahrhunderts: Ideen－Ziele－Resultate, in: Ivan Hlavacek und Alexander Patschovsky (Hg.), Reform von Kirche und Reich zur Zeit der Konzilien von Konstanz (1414-1418) und Basel (1431-1449), Konstanz 1996, S. 157-181; Ders., Klosterreform als Kommunikationsereignis, in: Gerd Althoff (Hg.), Formen und Funktionen öffentlicher Kommunikation im Mittelalter, (Vorträge und Forschungen, Bd. 51), Stuttgart 2001, S. 397-420. また，J. Kemper, Klosterreformen（注121）, S. 11-25 の研究概観も参照。

（121）Joachim Kemper, Klosterreformen im Bistum Worms im späten Mittelalter, (Quellen und Abhandlungen zur mittelrheinischen Kirchengeschichte, Bd. 115), Mainz 2006. また，R. Lossen, a. a. O.（注112）, S. 153 ff.

（122）Windesheimer Kongregation による改革運動については，Wilhelm Kohl, Die Windesheimer Kongregation, in: K. Elm (Hg.), a. a. O.（注120）, S. 83-106 も参照。

（123）R. Lossen, a. a. O.（注120）, S. 158 ff.

（124）R. Lossen, a. a. O.（注120）, S. 168 ff. 宮中伯が Klingenmünster に対して及ぼした影響と支配についての新しいモノグラフとして，Thorsten Unger, Klingenmünster und die Kurpfalz im 15. und 16. Jahrhundert. Untersuchungen zum Aspekt „Stift und Herrschaft“ am Beispiel eines ländlichen Kollegiatsstifts, (Stiftung zur Förderung der pfälzischen Geschichtsforschung, Reihe B: Abhandlungen zur Geschichte der Pfalz, Bd. 10), Neustadt an der Weinstraße 2009.

（125）R. Lossen, a. a. O.（注120）, S. 176 ff.

（126）皆川卓「ドイツ諸侯軍の近世的変容――プファルツ選帝侯の軍事権力を例に――」『歴史学研究』八一一号（二〇〇六年）六〇－七四頁，特に六四頁以下。

（127）中世後期ドイツにおける軍制の展開（傭兵の登場，農民・市民の召集軍，車陣などの戦術，火器の使用など）については，さしあたり，Bernhard R. Kroener, Kriegswesen, Herrschaft und Gesellschaft 1300-1800 (Enziklopädie Deutscher Geschichte, Bd. 92), München 2013, S. 2-20, 55-61 を参照。

（128）中世後期プファルツの軍制に関しては，概観として，M. Schaab, Geschichte（注22）, S. 201 f. 専門研究として，Hans Fahrmbacher, Das kurpfälzische Heerwesen im 15., 16. und 17. Jahrhundert, in: Mannheimer Geschichtsblätter 11 (1910), Sp. 30-

47, 51-63, 82-89, 107-115, 129-138, 146-159, 176-185（主に近世の軍制を扱う。）; Oskar Bezzel, Geschichte des Kurpfälzischen Heeres von seinen Anfängen bis zur Vereinigung von Kurpfalz und Kurbayern 1777, (Geschichte des Bayerischen Heeres, Bd. 4, T. 1), München 1925, S. 7ff.

(129) Friedrich von Weech, Das Reißbuch anno 1504. Die Vorbereitungen der Kurpfalz zum bairischen Erbfolgekriege, in: ZGO 26 (1874), S. 137-264. 皆川卓，前掲（注126），六九頁以下。

(130) この分野に関して，中世後期ドイツの領邦一般については，E. Schubert, a. a. O.（注1），S. 88 ff.; D. Willoweit, Entwicklung（注61），S. 127 f.; Ders., Gesetzgebung und Recht im Übergang vom Spätmittelalter zum frühneuzeitlichen Obrigkeitsstaat, in: Okko Behrends und Christoph Link (Hg.), Zum römischen und neuzeitlichen Gesetzesbegriff, (Abhandlungen der Akademie der Wissenschaften in Göttingen, Philologisch－historische Klasse, 3. Folge, Nr. 157), Göttingen 1987, S. 123-146; Armin Wolf, Gesetzgebung in Europa 1100-1500. Zur Entstehung der Territorialstaaten, München 1996, S. 96-148; Steffen Schlinker, Fürstenamt und Rezeption. Reichsfürstenstand und gelehrte Literatur im späten Mittelalter, (Forschungen zur deutschen Rechtsgeschichte, Bd. 18), Köln u. a. 1999, S. 238-351. また，Peter Moraw, Über Landesordnungen im deutschen Spätmittelalter, in: Heinz Duchhardt und Gert Melville (Hg.), Im Spannungsfeld von Recht und Ritual. Soziale Kommunikation in Mittelalter und Früher Neuzeit, (Norm und Struktur. Studien zum sozialen Wandel in Mittelalter und früher Neuzeit, Bd. 7), Köln u. a. 1997, S. 187-201; Thomas Simon, Krise oder Wachstum? Erklärungsversuche zum Aufkommen territorialer Gesetzgebung am Ausgang des Mittelalters, in : Gerhard Köbler und Hermann Nehlsen (Hg.), Wirkungen europäischer Rechtskultur. Festschrift für Karl Kroeschell zum 70. Geburtstag, München 1997, S. 1201-1217. 中世後期ドイツにおける領邦条令 Landesordnung のクロノロジーについて，P. Moraw, a. a. O., S. 190 ff. 多くの領邦で初めて領邦条令が制定されるのは，おおむね一五世紀後半以降であるが，先進的な北西部や南部では，より早かった可能性がある（特に北西部では遅くとも一五世紀前半から例がある）。個別の領邦における立法については，例えば，Wilhelm Janssen, „ ... na gesetze unser lande ...“. Zur territorialen Gesetzgebung im späten Mittelalter, in: Dietmar Willoweit (Hg.), Gesetzgebung als Faktor der Staatsentwicklung, (Der Staat, Beiheft, H. 7), Berlin 1984, S. 7-40; Ders., Städtische Statuten und landesherrliche Gesetze im Erzstift Köln und im Herzogtum Kleve (1350-

1550), in: Giorgio Chittolini, Dietmar Willoweit (Hg.), Statuten, Städte und Territorien zwischen Mittelalter und Neuzeit in Italien und Deutschland, (Schriften des Italienisch－Deutschen Historischen Instituts in Trient, Bd. 3), Berlin 1992, S. 271-294. 日本語文献として、若曽根健治「ティロール森林令雑考―領邦立法史研究覚書―」『熊本法学』二七号（一九七八年）一－四四頁、千葉徳夫「一四四六年テューリンゲンのラント條令―領邦身分制と行政立法―」『社会経済史学』四七巻一号（一九八一年）六五－八六頁。

(131) H. J. Cohn, Government（注68）, S. 243 ff.; A. Wolf, a. a. O.（注130）, S. 113. 一五世紀以降のプファルツにおけるポリツァイ条令については、Dorothee Mussgnug, Kurpfalz, in: Lothar Schilling und Gernard Schuck (Hg.), Wittelsbachische Territorien (Kurpfalz, Bayern, Pfalz－Neuburg, Pfalz－Sulzbach, Jülich－Berg, Pfalz－Zweibrücken), (Repertorium der Policeyordnungen der frühen Neuzeit, Bd. 3, 1), (Ius Commune Sonderhefte 116, 1), Frankfurt a. M. 1999, S. 1-594.

(132) D. Mussgnug, a. a. O.（注131）, S. 47, Nr. 19.

(133) D. Mussgnug, a. a. O.（注131）, S. 47f., Nr. 20; Paul Habermehl, Helmut Knauber, Leben mit der Stiftskirche. Bilder und Geschehnisse 1350-2000, Neustadt an der Weinstraße 2003, S. 54 f.

(134) D. Mussgnug, a. a. O.（注131）, S. 47, Nr. 18.

(135) この条令の文脈、特に裁判における機能が意図されていたことについて、D. Willoweit, Gesetzgebung（注130）, S. 131.